

創価大学英文学会

# 英語英文学研究

第79号 (第41卷 第1号)

2016年9月



**STUDIES IN THE ENGLISH  
LANGUAGE & LITERATURE**

No. 79 (Vol. 41, No. 1)

*September 2016*

SOKA UNIVERSITY



## 目 次

each other と one another の語法 (8) — <i>Penryn &amp; the End of Days</i> の場合— .....	松島 龍太郎	1
Globalizing Literatures and the Global Marketplace : Hemingway and Murakami .....	Mukesh Williams	27
英語受動態の指導について .....	藤本 和子	49



# each other と one another の語法 (8)

## — Penryn & the End of Days の場合 —

松島 龍太郎

### 0. Introduction

松島 (2013a) から始めた2つの相互代名詞 each other と one another について、構成員 (Referent) の数が2であるか3以上かによる使い分けは実際には当てはまらず、今まで扱った作品群ではさまざまな使い方が見えてきている。本稿では、Susan Ee の *Penryn & the End of Days* 三部作を扱う。この物語は、主人公の Penryn Young が narrator として一人称で語っていく形式で、narrative の動詞の時制は基本的に現在である。彼女の見聞きすること、経験することを、読者は彼女と同時に経験していく。

構成員の数については、2者および3者以上の many で分類する。「それぞれ」「グループ」「連続」、所有格についても確認する。本稿では、「三三五五 (in twos and threes)」という名称を「近隣グループ」に変更する。

例文については、each other と one another およびその所有格には下線を引き、その referent および員数は太字とし、その他の関連した部分には波下線を引く。

引用の例文は、構成員 (referent) ができるだけ分かるように、関係した文の前後から示すこともある。また、文の後の [brackets] に構成員を入れる。Speech 部分は“S”とする。末尾の (丸っこ) の数字は掲載ページである。

### 1. Penryn 01<sup>1</sup>

この3部作の第1巻では、each other が19例、one another が1例確認され、所有格はどちらも現れない。

---

<sup>1</sup> *Angelfall*.

### 1.1 Each other: 構成員が2の場合

構成員数が2であるものは、19例中7例である。例(1)は、物語の冒頭部分で、1対5のangel同士の闘いの場面である。数ヶ月前に、この世にangelたちが攻め入ってきて、世界は荒廃してしまった。主人公のPenryn Youngは、避難場所を変えようとして、妹のPaigeと母親とともに夕刻に外に出るが、偶然、angel同士の闘いを目の当たりにする。追われる側は翼の白いSnow (Raphael, 通称Raffe), 追う側のリーダーは黒い翼のNight (Beliel)である。Penrynは翼の色で、この場のangelたちにあだ名をつける。一見、5対1のmanyの2グループとも見えるが、SnowとNightの1対1の関係である：

- (1) When four of them finally manage to pin him down on the ground, practically sitting on him, Night Giant walks up to him. He stalks like the Angel of Death, which I suppose he could be. I get the distinct impression that this is the culmination of several battles between them. I sense history between them in the way **they** look at each other, in the way Night yanks at Snow's wing, spreading it out. He nods at Stripes, who lifts his sword above Snow. [Snow (Raffe) & Night (Beliel)] (11)

PenrynとRaffeは行動を共にするようになる。Penrynを含むものは2例あり、次はそのRaffeが相手である：

- (2) **We** look at each other without saying anything. [Penryn & Raffe] (147)

もう一つは、angelたちの巣窟に入り込んだPenrynがそのパーティー会場で遭遇するUrielというarchangelで、ここではPenrynの付けたあだ名のthe Politicianとなっている：

- (3) Because of the circular flow of the club, **the Politician and I** walk toward each other as we near the warriors' booth. [Penryn & the Politician (Uriel)] (191)

圧倒的なangelたちの支配に対して、抵抗しようとするResistanceのキャンプが森の中にあり、そこで知り合った双子の兄弟同士が2例ある。彼らの名前は、双子ということでTweedledum and Tweedledeeにちなんだ通称のDeeとDumを用いている。例(5)は隣同士の「連続」である：



(4) **They**'d never leave each other behind. [Dee & Dum] (121)

(5) **They**'re standing next to each other but still, I should have seen something. [Dee & Dum] (122)

そのキャンプから逃れようと、双子の兄弟と取引をして、女同士の catfight をする羽目になった Penryn と相手の Anita の身体同士が<sup>3</sup>1 例ある：

(6) **Our bodies** contort around each other as we roll in the mud around the wash basins. [Anita & Penryn's bodies] (126)

次は、天使達の偵察隊の行動パターンを Raffae が Penryn に教えるところで、連続である：

(7) "It's unlikely there will be **two units** flying in the same direction within an hour or two of each other. [Two units, i.e. two squads of angels] S (160)

## 1.2 Each other: many の場合

構成員が many のものは、19 例中 12 例である。「それぞれ」から見ていく。これは、松島（2016）では、「構成員のそれぞれが他の構成員のそれぞれに対している」関係（page 6）としているが、本稿では、修正して「構成員が不特定に他の構成員と関係している」場合を「それぞれ」とする。また、「三三五五」(in twos and threes) は数字が現れているため誤解を生じやすいため、本稿では「近隣でグループをなす」とし、単純化して「近隣グループ」とする。「近隣」は距離的な場合も精神的な場合もある。

次の (1) は、Resistance の首領である Obadiah West（通称、Obi）が Penryn と Raffae に語る場面で、構成員は広く取れば人類一般であるが、彼らにとっては身近な San Francisco 周辺の生存している人々、さらには Obi が率いる森の中のキャンプの人々である。Penryn たちは、キャンプで Obi たちに会う前、cannibal の跡を目撃している。はっきりしたことはこの時点では不明であるが、侵攻した天使たちのせいであると Obi は考える。この they は angels である。このようなことを実行するような場合、近隣グループができるだろうが、一般論で構成員数が非常に多いためにはっきりとしたグループ化は見られないとする：

- (1) “They have **us** eating each other, for God’s sake.” [People at the Camp or around San Francisco] S (105)

次の (2), (3) は, 上の (1) に続く Obi の発言であり, **we** はやはり人類一般を指すとしても良いが, 彼らにとっては San Francisco 周辺の生存している人々, さらにこのキャンプの人々「それぞれ」である:

- (2) “We can’t make a stand if **we’re** bashing each other over the head and killing each other for cans of dog food.” [People at the Camp or around San Francisco] S (105)
- (3) “We can’t make a stand if **we’re** bashing each other over the head and killing each other for cans of dog food.” [People at the Camp or around San Francisco] S (105)<sup>2</sup>

無法地帯となった夜の街には多くのギャング団が徘徊し, Penryn は逃げ延びなければならぬが, 次は, そのギャング団一般であり, 「それぞれ」のギャング団の対立である:

- (4) I consider leaving one of the wings here on the street to distract **the gangs** and encourage them to fight amongst each other instead of chasing me. [The gangs] (21)

次の例は, あるギャング団が Penryn, Penryn の母親および Raffe の隠れ家を襲撃するが, そのギャング団の構成人数は3から6人ほどである. この団体の構成員「それぞれ」である:

- (5) Outside, **the gang** calls to each other. [The gang] (43)

Penryn は, 天使に連れ去られた妹の Paige を救出するために, 天使たちの巣窟 aerie に向かう. 例文 (6) は, 巣窟のある San Francisco 市街地に入り, その難民キャンプで Penryn が見た人々で, 「それぞれ」である:

- (6) The people—although **they** aren’t eating each other as far as I can tell—look hungry and desperate. [The people at the Camp in San Francisco] (164)

天使たちの侵攻の後, 通常の世界は荒れ果て, 人々の心は荒んでいるのであるが, Obi の主導する Resistance が天使達の巣窟を襲撃し破壊したことで喜び合っ

---

<sup>2</sup> 例 (2) と (3) は同じ文であるが, 例1につき例文1とする. 以下同じ.

ている、第1巻終了間際の場面である。例文(7)は、不特定多数の「それぞれ」である：

- (7) **Strangers** who would have pointed guns at each other on the street are now hugging. [Strangers] (278)

次は、森の中のResistanceのキャンプで、トイレの設営のあと身体を洗う男達である。この設営にはRaffeも参加していたが、この水かけにはRaffeは入ろうとしない。シャツを脱ぐと、翼を切り取られた跡が背中にあるのを皆に見られ、angelであることが暴かれてしまうからである。「それぞれ」の分類にはいるが、ホースの数にもより「交互・交代」、「連続」あるいは近隣のグループ化も考えられる：

- (8) **They** line up to hose each other off. [Latrine workers, except Raffe] (124)

Penrynは、妹のPaigeと再会した後、天使たちが作り出したscorpion（これはPenrynの付けたあだ名で、天使側はlocustと呼ぶ生物）に刺されて仮死状態になる。Paigeは天使に手術を施されていて、継ぎ接ぎされた人形のように見えるが、歩くことができるようになっており、Penrynをトラックの荷台に乗せることもできる。ホテルの地下では、Raffeの翼を戻す手術も行なわれていたが、医者の方天使のLaylahの裏切りによって、Raffeの翼は、彼の翼を切り取った天使Belielの背中に付けられ、Raffeのほうは大きなこうもりのような翼を付けられてしまった。Raffeは翼を広げると「悪魔」のように見える。その悪魔のように見えるRaffeが、仮死状態のPenrynを崩れかけた巣窟から運び出し、継ぎ接ぎ細工のようなPaigeがPenrynをトラックに運び上げ、以前から人々に恐れられていた母親がPenrynを介護する光景から、トラックの荷台の人々はできるだけ離れようとする。例(9)は「それぞれ」で近隣グループができる。あるいは、全体を1グループとしても良い：

- (9) **The people** who are already on the truck back up into each other like animals herding together. [The people on the truck] (277)

「連続」は3例あり、次の(10)は、無生物の「連続」である。無生物はこの例のみである：

- (10) **These houses** are nowhere near as close to each other as houses in the suburbs, but they are still regularly spaced along the road. [These houses] (78)

例 (11), (12) では, angel たちの巣窟のあるホテルの地下に, angel のさらって来た子供たちがいる. いる, というよりも「積み上げられて置かれて」いる. そして, 妹の Paige はこの子供たちの中にいるのである. この2例は, 重なり合いの「連続」である:

- (11) Against the white wall are stacks and stacks of children.

**Some** stand stiffly against the wall and on each other, half a dozen deep. [Some children] (240)

- (12) And **some** lie on their backs and stomachs, stacked on top of each other like cords of wood. [Some children] (240)

### 1.3 One another

もう一つの相互代名詞の one another は1例のみで, many である. 巣窟のパーティー会場では, 天使たちは美女をはべらせているが, 彼女たちは単なる飾りという位置に置かれている. 実は, 天使たちは人間の女と「関係を持つ」ことは禁止されている. ここは, 天使たちの「それぞれ」で近隣グループもある:

- (1) **The angels** seem more interested in socializing with one another than with the women. [The angels] (193)

### 1.4 まとめ

相互代名詞の each other では, Penryn が入るものは, 1.1 (6) を含めて構成員2のところだけで3例と意外に少ない. 構成員が many の場合, (1) から (9) までの9例を「それぞれ」とすることができる. ただし, (8) では, そこに「連続」「交代」「グループ」もありうる. 重なり合いの「連続」として (11), (12) の2例がある. 構成員が無生物の場合は1例だけで1.2 (10) の「連続」である.

もう一つの one another は, 1例だけで構成員は many で「それぞれ」である. 全3巻を通じて, one another はこの1例だけである.

出現率は、本文283ページで、each otherが14.89（283/19）、one anotherが283.00（283/1）、両方あわせると、14.15（283/20）である。

## 2. Penryn 2<sup>3</sup>

この第2巻では、each otherは40例、所有格のeach other'sは2例の、計42例である。もう一つの相互代名詞のone anotherは皆無である。

### 2.1 Each other: 構成員が2の場合

構成員が2であるものは40例中18例である。そのうち構成員が人間同士のものは(1)-(12)の12例である。まず、双子の兄弟のDeeとDumが3例ある：

- (1) **They** exchange grins and wiggle their eyebrows at each other. [Dee & Dum] (8)
- (2) **Dee and Dum** look at each other, assessing. [Dee & Dum] (9)
- (3) **They** look at each other and simultaneously call out, “Librarian mud fights!” [Dee & Dum] (77)

Penrynが危機的状況にあるときに、その近辺の2名の場合が3例ある。例(4)は、Resistanceのキャンプ兼避難所のPalo Alto's高校(Paly High)で、3人の男達に襲われている時に、Penrynが近くの2人に助けを呼んでくるように求めるが、その2人は言うことを聞いてくれない：

- (4) “Get Obi’s men,” I whisper-shout to the couple.

**They** grip each other tightly and hide behind a post. [An older couple watching Penryn fight] (49)

次は、San Franciscoの港で、逃げる人間達がscorpionの網に捕まるが、別々の網に捕らえられた親子（父と息子）である：

- (5) A boy of about eight was separated from his father. **They** reach for each other under different nets. [A father & his son] (121)

同じ場面で、若い男女が別々の網に捕らえられる。名前を呼び合うので名前が判明する：

---

<sup>3</sup> *World After*.

- (6) “Lisa!” the guy calls to her with desperation. They strain against the mesh and stretch their arms as far as **they**’ll go to try to touch each other. [Brian & Lisa, who are trapped under different nets] (138)

港で捕まった人々は、船で Alcatraz の元連邦刑務所に連れて行かれるが、(7)-(10) は、Penryn がそこで知り合ったインテリ (Alpha) と街のごろつき (Tattoo) の 2 人で、名前は不明のため Penryn が勝手につけたあだ名である。二人は、最初はいがみ合っていたが協力し合うようになり、Alcatraz からの脱出計画を立てているところである：

- (7) “What’s your plan?” I ask Alpha and Tattoo. “Is there any way I can watch this and meet you guys?”

**They** look at each other, and it’s clear neither of them has a plan. [Alpha & Tattoo] (166)

- (8) **The guys** look at each other again as if having a silent conversation. [Alpha & Tattoo] (168)

- (9) **Tattoo and Alpha** eye each other, both looking unconvinced. [Alpha & Tattoo] (169)

- (10) **The men** nod to each other. [Alpha & Tattoo] (169)

構成員の片方が Penryn のものが 4 例ある。次の (15) は、第 1 巻で Penryn が私闘した相手の Boden である：

- (11) Boden gives me a snarl as **we** pass each other. [Boden & Penryn] (19)

次の (12) は、双子の Dee と Dum は区別が付かないから、片方だけの時は、Penryn は Dee-Dum と呼んでいる：

- (12) **Dee-Dum and I** look at each other, both wondering what she’s doing in there. [Dee-Dum & Penryn] (36)

人間と天使では、Penryn と Raffae のものが 2 例ある。二人は、乱闘となったパーティーからいったんは逃げ出したが、Raffae は自分の翼を取り戻さねばならず、Penryn は妹を救出しなければならない。例 (13), (14) では、そのために英気を養っている：

- (13) **We** hold each other in our little pocket of warmth, hidden from the monsters of the night by the mist swirling around us and the bloody surf pounding at our feet.

[Penryn & Raffé] (259)

- (14) Then we sit by the fireplace, drinking hot water from mugs while I tell him what I've been up to since **we** last saw each other. [Penryn & Raffé] (267)

天使同士のものは3例ある。次の(15)は、第1巻冒頭でRafféに天使の剣で腹を切られたBelielが治癒のためベッドに運ばれてくる（天使の剣の傷は治りにくい）のだが、Belielは嫌われ者らしく、2体の天使が彼に「いじわる」をすることである：

- (15) **The angels** give each other sly grins. [Burnt & the other angel who brings meal] (174)

次の(16)は、天使達のパーティーが一転乱闘となったところで、2体の天使が、決闘のとき見られるように、180度の角度で向き合いながら円周上を回っている“circle each other”の例である：

- (16) Two angels go at it while **two others** circle each other. [Two angels] (243)

次の(17)は、RafféとBelielで、やはり“circle each other”の例である：

- (17) **They** circle each other like sharks getting ready to attack. Beliel's limp is gone now that he's lured Raffé. [Raffé & Beliel] (127)

最後にscorpionまたはlocust同士が1例あり、これは天使達が人間をもとに作り出した空を飛ぶ生物であり、locustは天使が付けた名前で、Penrynはscorpionと呼んでいる。毒針を人間に刺すからである。例(18)は、海に落ちたscorpionで、彼らは泳げないので、自分は助かろうとして何とか相手の上になろうとしている、交互の重なり合いである：

- (18) **They** thrash and try to climb on top of each other. [Two scorpions or locusts] (118)

## 2.2 Each other: manyの場合

構成員がmanyのものは22例ある。「近隣グループ」が多く、「それぞれ」もあ

り、両方考えられるものもある。まず、(1)-(9) は人間同士のものである。第1巻は仮死化した Penryn をトラックに載せて脱出する場面で終わり、第2巻はその場面の続きから開始する。仮死化しているが、見たり聞くことはできるので、一人称の narrative ではあるが、物語の展開を述べることができる。周りの人々は彼女が死んでいると思っている。例 (1) は、Penryn が仮死状態から起き上がったところで、トラックの荷台の人々はパニックを起こしそうである。彼らは、1.2 (9) と同じ人々である。近隣でグループができる：

- (1) **The other refugees** crush against each other as they press toward the rear of the truck. [The other refugees on the truck] (3)

次の例も同じ人々であるが、目的地について、Penryn たちを避けて我先にと降りようとしており、近隣グループである：

- (2) **The people in our truck** push and shove each other in their rush to get away from us. [The people in our truck] (6)

次は、キャンプ／避難所となっている Paly High の場面で、scorpion が襲ってきたため、人々は校舎に逃げ込もうとするが、フェンスの外にいたので、それを乗り越えなければならない。近隣グループができる：

- (3) **People** scream and shove each other at the fence, trying to climb over it. [People staying at Paly High] (87)

Penryn は妹を求めて San Francisco の港に行くがそこで scorpion に捕らえられてしまい、他の者と一緒に Alcatraz 島にフェリーで連れて行かれる。島につくと檻に入れられた人々がおり、scorpion は面白半分に彼らに「えさ」を与える。檻の前面は網目になっていて手を出すことができる。近隣グループができる：

- (4) **The people inside** are fighting each other for the bloody scraps. [The people inside a cage/container] (147)

次の (5) は、(4) の直後に Penryn が「えさ」として彼らに与えられようとし、近隣グループができる。ただし、scorpion は人間をからかっているだけであるが：

- (5) Hunched with sharp angles accentuating arms and legs, rags dragging on the



floor, **they** shove each other out of the way to reach me as fast as they can. [The people inside a cage/container] (147)

次は、第1巻で破壊した天使の巣窟跡に戻って、天使が不死身らしいと気が付く場面である。ここには、Penrynのほか、双子のDeeやDumなどキャンプから同行した者達で、近隣グループである：

(6) **We** all look at each other, not wanting to say what we're thinking. (40) [Penryn and other people from Paly High]

Raffeの所有していた天使の剣は、現在はPenrynが使用を許されているが、この剣には、意思と記憶があり、時々Penrynに過去の記憶を見せることがある。剣の記憶ではあるが、Raffeの記憶とも重なる。そういう記憶を見せる夢の一つで、かなりの過去らしいが、この女達はRaffeの配下の天使たち（the Watchersという戦士たち）と結婚している。しかし天使は人間の女（Daughters of Men）と「関係」することは禁止されていて、the Watchersは地獄に堕とされる。妻たちには地獄からの迎いのhellionたちがやって来るのである。Raffeは彼女らをhellionの手から救おうとしている。例(7)は、近隣のグループである：

(7) **The women** clutch at each other in fright. [The Watchers' wives] (54)

キャンプ／避難所で銃にサイレンサーが付けられていることに気づいてPenrynは暗澹たる気持ちになる。例(8)は、キャンプの人間同士の「それぞれ」である。

(8) If we're attacked by angels, noise won't matter because the angels will already know where we are. But if **we're** shooting each other. . . <sup>4</sup> [We, people in the school] (17)

構成員が人間の最後の例である。例(9)は、PenrynがSan Franciscoの港に着くと、声を立てずに逃げる人々がいる。「それぞれ」である：

(9) Aside from their pounding feet on the buckled wooden planks, **they** don't make any other noise. No screaming, no calling out to each other. [People running] (118)

天使たち同士が8例((10)-(17))ある。次は、Penrynが第1巻で政治家と呼んだ

---

<sup>4</sup>ピリオド3個は原文。

ArchangelのUrielが催すパーティーで、Urielの思惑とは異なり、その場にいた天使たちは怒り狂い、そこに連れ出された人間の男に襲いかかろうとする。近隣グループである：

- (10) **The multitude** shoves each other to try to reach the man. [Many angels at the party] (234)

次も同じ場面である。天使の戦士は身体も大きく、力も強い。近隣グループである：

- (11) **The warrior angels** rage and yell as they restlessly jostle each other, cheering on the ones tearing at the man who is drowning in their violence. [The warrior angels at party] (234)

次も同じ場面であり、近隣グループである：

- (12) In pockets of the crowd, angels **who**'ve been shoving each other in the race to catch a human start throwing punches at each other. [Angels] (235)

次の(13)も同じ場面であるが、最初は人間の男をめざしていたが、途中から天使同士での闘いとなる。真剣勝負ではないけれども、彼らはけんか好きなのであろう。「それぞれ」で近隣グループである：

- (13) In pockets of the crowd, **angels** who've been shoving each other in the race to catch a human start throwing punches at each other. [Angels] (235)

次の(14)は、その乱闘中にPenrynとRaffeが再会し、その場を二人で引き上げようとする時に、他の天使たちの闘い方を目撃するが、闘いは単なるじゃれあいのようなのである。「それぞれ」で、偶然近くにいる者同士の近隣グループである：

- (14) These fights aren't meant for real damage, at least not to each other. [Two angels in many groups] (243)

次の(15)、(16)は、Raffeの持っていた天使の剣がPenrynに見せる、「明るい」記憶である。Raffeを先頭にthe Wacherたち戦士の栄光の姿をうかがうことができる。「それぞれ」で、近隣グループである：

- (15) Fighting beside him and protecting his back are angel warriors, some of whom I've seen before at the old aerie. **They**'re joking and egging each other on as they

fight and defend each other from the monsters of the night. [The Wachers, or Raffé's warriors] (64)

- (16) Fighting beside him and protecting his back are angel warriors, some of whom I've seen before at the old aerie. They're joking and egging each other on as **they** fight and defend each other from the monsters of the night. [The Wachers, or Raffé's warriors] (64)

次の(17)は、Rafféが自分たち天使の話を Penryn にするところで、「それぞれ」である：

- (17) "The only way to keep a society of killers together for eons is to have a strict chain of command and zero tolerance for breach of rules. Otherwise, **we** all would have slaughtered each other a long time ago." [Angels] S (269)

次の(18)は、Penrynが人間の男たちについて持っている一般論であるが、その持論を天使の男にも適用しようとしている<sup>5</sup>。「男」についての一般論として「それぞれ」である：

- (18) Males—**they**'ve all trained against each other. [Male angels as well as male humans] (244)

次は、scorpionのもので、1例だけである。港で、Rafféを追いかけるか否かで迷っている。近隣グループである：

- (19) **Almost half of them** stay on the ground, looking at each other, unsure. [Scorpions] (130)

無生物のものが2例あり、(18)は、主語はcostumesであるが、正確に言うならば“wheeled racks of costumes” (page 207) である。「それぞれ」で近隣グループである：

- (20) **Costumes** are being rolled around so fast it's amazing they're not crashing into each other. [Wheeled racks of costumes] (207)

もう一つの無生物は、Urielに付き添う「飾り」として選ばれたPenrynとその

---

<sup>5</sup> 登場する天使はほとんどが男性である。女性もいるが、名前が挙がり登場するのは医者 Laylahのみである

相方の髪飾りである。二人は双子のように同じに見えなければならず、その装飾ということで3本以上のmanyとする。確かに2である可能性はあるが、こういうものは多いほうがごまかしやすいだろう。近隣グループである：

- (21) **Playful ribbons of blue and silver makeup** tease each other from our temples and curve around our eyes and over our cheekbones. [Playful ribbons of blue and silver makeup] (209)

最後の例は天使たちの「連続」である。天使の剣がPenrynに見せている記憶の(10), (11)の次のシーンで、「暗い」記憶である。地獄the Pitにいるthe Watchersの姿が見える。直前の勝利の場面とはまったく逆の「堕ちた」姿である：

- (22) A squat, bat-faced demon with bat wings rides on the shoulders of each prisoner. The demons hold the chains to the collar, using it as a bridle. They jerk the chains one direction, then another, cruelly driving the spikes in and making them fly like drunks. More hellions hang off some of the ankle and wrist shackles that bind **the prisoners** to each other. [The prisoner angels in the Pit, i.e. the Watchers] (65)

### 2.3 Each other's

所有格のeach other'sは2例とも構成員manyである。例(1)は、避難先でResistanceのキャンプであるPaly HighでPenrynを襲撃する男3人である。この場合は、1列の邪魔になる「連続」である：

- (1) I start shifting to the side to line them up in a row so they'll get in each other's way if they rush me all at once. [Three guys who attack Penryn, with a hummer, a kitchen-knife, and a bat] (49)

人間の女Daughters of Menと結婚した天使は地獄the Pitに堕とされる。女の方は魔王の使徒であるhellionに渡される。それを知った女達である(2.2(7)参照)。近隣グループである：

- (2) **The women** cry in each other's arms. [The Daughters of Men, i.e. the wives of the Watchers] (53)

## 2.4 まとめ

相互代名詞は each other のみで one another は現れない。構成員が2のものは18例で、うち、人間同士が14例で、そのうち Penryn 含むものが4例、天使同士が3例、scorpion 同士が1例である。天使では2例が “circle each other” である。scorpion は交互の重なり合いである。

構成員が many のものは、ほとんどが「近隣グループ」に分類できる。人間同士が9例、天使同士が8例であるが、(18) は「男」同士である。Scorpion 同士が1例、無生物は2例である。最後に天使たちの「連続」が1例ある。

所有格の each other's は2例で、両者とも人間で、一つは「連続」、もう一つは「近隣グループ」である。

出現率は、本文314ページで、each other が7.48 (314/42) である。

## 3. Penryn 03<sup>6</sup>

この第3巻では、each other は48例、所有格の each other's は4例で、計52出現する。もう一つの相互代名詞の one another はここでも皆無である。

### 3.1 Each other: 構成員が2の場合

構成員2の場合は13例である。人間同士は3例あり、うち1例は Penryn を含む。例(1)は、カルト団の the New Dawn に誘拐された Penryn が、自分を護送している運転手に、誘拐の目的を聞き出そうとし、また、解放してくれるよう説得している：

- (1) “Get over yourself. We’re all in danger. **We** all need to work together and help each other if we can.” [Penryn & the driver] S (134)

次は、双子兄弟の Dee と Dum である：

- (2) **The twins** look at each other and make an O with their mouths like little boys telling each other they’ve been busted. [Dee & Dum] (261)

例(3)は、一般的なたとえであり、もともと双子なので構成員2とする：

---

<sup>6</sup> *End of Days*.

(3) The twins look at each other and make an *O* with their mouths like **little boys** telling each other they've been busted. [Little boys] (261)

例 (4) は、地獄 the Pit からの使徒の hellion である：

(4) **The two remaining hellions** are attacking each other and fighting around Beliel. [The two remaining hellions] (167)

例 (5) は、普通の天使と Watcher との遭遇を2頭の猫にたとえている：

(5) When angel meets Watcher, they're like **two feral cats** meeting each other in an alley. They raise their feathers, making their wings look spiky and larger than before. [Two feral cats] (305)

次の例は、Raffe と彼の剣である。天使の使う剣は特殊で、意思や記憶がある。この剣は、Raffe が純白の翼を悪魔の翼に換えられてしまうまでは、彼のものであった。現在は Penryn が使い、彼女はその剣に Pooky Bear という「ふざけた」名前を付けてしまった：

(6) They missed each other so much. [Raffe & the angel sword, now called Pooky Bear] (231)

天使同士のものが2例あり、両方とも Raffe と Josiah<sup>7</sup> である。例 (7) は、Uriel が Gabriel, the Messenger of God を殺したという情報を二人が得たところである：

(7) They stare at each other, Raffe looking just as shocked as Josiah. [Raffe & Josiah] (121)

例 (8) は、the Pit に墮ちた Watchers を救出に行こうと Penryn が提案し、Raffe と Josiah の驚いた表情である。こちら側の世界と the Pit とは自由に行き来できない。特に the Pit からは戻って来られないはずである：

(8) **The guys** glance at each other as if wondering whether I've lost my mind. [Raffe & Josiah] (168)

天使と人間とは5例あり、いずれもその人間は Penryn である。例 (9) は相手

---

<sup>7</sup> Josiah は Raffe の the Watchers の一員である。第1巻で Raffe は Josiah を通じて医者 Laylah と連絡を取り、切り取られた翼を背中に付け戻してくれと依頼する。

がBelielで、二人は敵対関係にあるが、天使たちの「戦士の裁き」<sup>8</sup> かけられ、hellionたちに囲まれたため、この互いの背中を守る「同盟関係」は偶然である：

(9) **Beliel and I** are forced to back up until we're as close to each other as we can stand. [Beliel & Penryn] (152)

残りの4例は、PenrynとRaffeである。この二人には恋愛感情が芽生えているように見受けられるが、人間の女(Penryn)を愛してしまった場合、天使(Raffe)はthe Pitに堕ちてしまわないのか。例(10)、(11)はthe Pitから仲間を救出する直前にRaffeがPenrynにthe Pitの光景を見せるところである：

(10) Instead of putting his arm under my knees, he holds me up with his arms around my waist, with **us** facing each other in a hug. [Penryn & Raffe] (211)

(11) **We** hold each other, pressing tighter and harder together. [Penryn & Raffe] (213)

例(12)は、天使を迎撃しようと準備をするPenrynであるが<sup>9</sup>、Raffeのことが頭から離れない：

(12) Will he kill humans in order to be accepted back into angel society? If **we** have to fight each other, will he hunt me like an animal? [Penryn & Raffe] (271)

例(13)は、すべてが決着し、二人が自分達の気持ちを確認するところである：

(13) **We** hold each other close. [Penryn & Raffe] (327)

### 3.2 Each other: manyの場合

構成員がmanyのものは全部で35例あり、次の順に見ていこう。まず、単純に「それぞれ」であるもの[(1)-(8)], 「それぞれ」で「近隣グループ」ができるもの[(9)-(20)], 「連続」[(21)-(24)], 内部にグループがあるもの[(25)-(27)], 最後に2グループのもの[(28)-(35)]である。

Penrynは、次期Messengerを決める選挙会場に連れて来られる。そこは第2巻で乱闘の起きたパーティー会場である。天使たちは応援する候補者の小グループに分かれて取っ組み合いのけんかをして勝ったほうが票を得るという仕組みらし

<sup>8</sup> A warrior's trial. "The rule is simple. The last one alive goes free." (151) 裁きかけられるのは、Penryn, Beliel, hellionたち。ここではhellionは多数おり、その中で、the Pitから来た2体のhellionがリーダーである。

い。候補者は archangel の Raphael (Raffe), Michael, Uriel である。例 (1) は、そういう天使たちの一部の「それぞれ」である。

- (1) Some of the angels have what looks like blood smeared across their faces like war paint. **Others** snarl as they fly past each other over broken plates and crushed champagne glasses. [Other angels] (145)

Uriel は自分が Messenger に選ばれたいがために「世の終末」apocalypse を演出して、ゾンビもどきを地から出し、また、ヒドラもどきも作り出す。後者は頭が7つあり、それぞれ異なる動物の頭を持ち、それぞれの額には「666」の数字がある。Penryn はそれゆえ sixer 「六さん」とあだ名をつける。天使の下でこの怪獣の開発にかかわった Doc の証言では最初に3種類を作り、その後の大量生産でその3種「それぞれ」をかけあわせたという：

- (2) “We had three of them.” [Doc says.]

“There are three of those things?” [Penryn says.]

“All variations of each other. With that many animals mixed together in one body, things are bound to go wrong. At the same time they were making them, Laylah, the lead physician, was working on an apocalyptic plague. It was supposed to be for us humans, but there was a lot of experimentation to make it as gruesome as possible. Somehow, one of the strains got passed on to the sixers.” [Those things, sixers] S (262)

次は、Paly High が襲撃されてリーダーの Obi が倒れ<sup>9</sup>、Penryn は彼の跡を継ぐよう頼まれる。例 (3) は、Penryn の思考であり、彼女には Obi の思考が入り込み、my own people と表現するが、Obi の率いてきたこのキャンプにいる人々「それぞれ」である：

- (3) But I can't watch **my own people** splinter off and die and maybe tear each other to pieces while they're at it. [My own people] (253)

次は、やはり Penryn には Obi の思想が乗り移っていて、この戦いの終結後のことも考えている。Penryn の呼びかけで集まってきた人々「それぞれ」である：

---

<sup>9</sup> 下の (9) の「ゾンビもどき」による襲撃である。



(4) “If **they** bruise each other while I’m trying to keep them alive, that’s just something we’ll have to deal with.” [People gathering at the Golden Gate] S (270)

次は、Raffe の見た人間「それぞれ」の行動である：

(5) Raffe has seen **people** do the worst possible things to each other. [People] (271)

次は、Penryn の呼びかけで天使たちへの迎撃は the Golden Gate Bridge と決まり、そこに人々は集結し始めるが、集まる人類は仲間内での闘いに走る。誰が、どのグループが、主導権を握るかで争いを始めるのである。単位は、個人、グループ「それぞれ」である：

(6) Everyone is exhausted and afraid, and all **they** seem to want to do is fight each other. [People gathering at the Golden Gate] (270)

次の (7) は、Golden Bridge で Obi たちが反撃のために計画していた talent show で、the San Francisco Ballet のダンサーたちの「それぞれ」であるが、その消息の分かった 12 名中 7 名がこの show までたどり着いたという：

(7) “In the end, **twelve of us** found each other, but not all of us made it this far.”  
[Twelve of the San Francisco Ballet dancers] S (283)

次は、the Watcher たちはこちらの世界に戻ってこれたことができたが、Beliel は皆のために the Pit に残り「こちら側」の Beliel は息絶える。Beliel を葬らなければならないが、彼をどのように評価するか「それぞれ」言い出しかねている：

(8) **None of the guys** will look at each other, as though stubbornly and silently insisting on something that each thinks the other might object to. [The Watchers] (226)

次に、「それぞれ」ではあるが、近隣グループを形成するもの [(9)-(20)] を見ていこう。例 (9) は、選挙会場の地中から起き出した人々であるが、彼らは Uriel の陰謀で scorpion/locust によってゾンビのようになっている<sup>10</sup>：

(9) The locust stung stare at him [Uriel], stunned. Then **they** gaze around at each

---

<sup>10</sup> この scorpion/locust に刺されると、Penryn がそうであったように、一時仮死状態になるが、一定の時間が経つと動けるようになる。また、「生氣」を吸われるとミイラのようになり、これは元に戻らない。Uriel は毒の量などを調整して、タイミングよく全員が一度に起きるようにして、会場の地中に埋めていたものと思われる。

other, looking frightened and disoriented. [The people stung and sucked by locusts, who “resurrected” from the earth] (162)

例 (10) は、上の (9) の「死者がよみがえる」シーンを見た天使たちである：

(10) **Many of the angels** glance uneasily at each other when Uriel declares himself the Messenger. [Many of the angels] (162)

例 (11) は、Raffe が会場に現れ、Uriel と議論を始めるが、それを聞いた他の天使たちである：

(11) **The angels** look at each other. [The angels] (163)

次の (12) は、地獄 the Pit に堕ちている the Watchers で、彼らはもともと Raffe の配下で戦士である。Raffe と Penryn は Uriel に対抗するために彼らをこちらの世界に連れ戻そうとして the Pit に到着する。そして、the Pit lord との闘いのあと、自分たちの怪我の様子を見ているところである。天使は傷を負っても時間が経てば直ってしまう：

(12) **The Watchers** look each other over in the brightening light, assessing themselves for injuries. [The Watchers] (200)

次は、Penryn から、the Pit から脱出することができると聞いた the Watchers の様子である：

(13) There’s a moment of silence as they stare at me, then **they** look at each other. [The Watchers] (202)

次は、Raffe が Penryn の言葉を保証して、the Pit から戻れると聞いた the Watchers である：

(14) **They** all look at each other. [The Watchers] (202)

次は、Raffe から、どのくらいの期間 the Pit にいたかを告げられた the Watchers である：

(15) The Watchers exchange looks with each other. [The Watchers] (208)

次は、地獄 the Pit からは出られるが、それは彼らがもっていた世界ではないと、Raffe に告げられた the Watcher たちである：

(16) **The Watchers** look at each other as though trying to process that. [The

Watchers] (216)

次は、the Pitからこちらの世界に戻るためには門の役割をする天使the gateway Watcherが一人必要であり、その天使はthe Pitに残らなければならないと分かったthe Watcherたちである：

(17) **They** all look at each other, understanding that the gateway Watcher could be any of them. [The Watchers] (216)

例(8)で息絶えたBelielは荣誉ある空中茶毘に付される。天使たちは、5体でBelielの手足と肩を支える。そして、例(18)はそれ以外の天使たちである：

(18) **The others** fly, crisscrossing each other like a net far below the body. [The other Watchers] (228)

Paigeはscorpion/locustを操ることができる。しかし、White Streak<sup>11</sup>という大型のscorpionは自分こそ彼らのリーダーであるとしてそれを認めない。両者の間で覇権争いとなる。Paigeが危機におちたとき2体のscorpionが援軍に入るが一蹴されてしまう。例(19)は、それ以外のscorpionたちである：

(19) **The rest of the scorpion-tailed locusts** fly in nervous, agitated loops above and in front of me, going in every direction and just barely avoiding crashing into each other. They seem confused and upset. [The rest of the scorpion-tailed locusts] (293)

例(20)は、日没後襲ってくる天使たちに対する対抗手段の一つは強烈な光である。暗闇でも目が見える天使たちの目は、人間よりも感度が良いために、暗闇でいきなり強い光を浴びると打撃も大きい。その光を浴びた場面である：

(20) The angels shield their eyes behind their arms and pause in their flight. **Several of them** crash into each other. [Several of the angels] (295)

次に、「連続」は重なり合ってもいて4例ある。例(21)は、RaffeとPenrynはthe Pitを去る直前二人でthe Pitの様子を見ている。Handsとは、手の形をしたモンスターで、砂地の生息地に足を踏み入れる生物を引きずり込む。比喩表現としてはcurrents of lavaであろうが、実際に目にしているのは“hands”で、重なり合

---

<sup>11</sup> やはり、Penrynが付けたあだ名である。

い「連続」している：

(21) **The Sea of Hands** below shifts and moves like currents of lava flowing over each other. [The Sea of Hands below or currents of lava] (212)

例 (22) は、Golden Bridge の下にいた者たちは「六さん」の出現で逃げ惑う。重なり合いの「連続」である：

(22) Everyone below the bridge is in a panic. They crawl over each other, trying to get away from the spot where the sixer appeared. [Everyone below the bridge] (310)

例 (23) は、同じく逃げ惑う人々である。橋の下には避難用にネットが張られていて、そこに逃げようとして、「連続」して重なり合う：

(23) Our people scramble to the edges of the nets, **some of them** climbing over each other. [Some of the people who scramble to the edges of the net] (310)

例 (24) は、Penryn が下を覗くとたくさんの「六さん」が次々に「連続」して重なり合っているのが見える。額の 666 は彼らの体数も意味しているようだ：

(24) All around us, **more sixers** reach up and climb on top of each other to get on the bridge. [More sixers] (313)

次に、集団内にグループができ、そのグループ内での相互関係のものが 3 例ある。例 (25) は、the Pit から抜け出し、Paly High に戻ると、そこはあの scorpion/locust に刺され地から出てきたゾンビもどきに襲われていた。そこにいる人々の中に、全員ではないが、2 人から数名のグループが複数できている：

(25) **People** cry over bodies, hug each other, walk dazed and in shock. [Groups of a few people] (240)

次の (26) は、地獄 the Pit に入った Penryn とそこで出会った 12 体ほどの the Watchers であり、Raffe はまだこの場に現れていない。いくつかのグループができている：

(26) **We** scatter, half running with our backs to each other. [Penryn and about a dozen of the Watchers] (179)

例 (27) は、poses が複数形のため、2 体のマネキンの組み合わせ（グループ）がいくつかあると考える。誰かのいたずらであろう：

(27) In the windows, naked mannequins lie on top of each other in sexual poses.

[Naked mannequins in the windows] (60)

最後に、2つのグループのものが8例ある。例(28)では、妹のPaigeが天使たちへの反撃に役立つと聞いてリーダーのObiがPenrynに協力を求める。Penryn姉妹対Obiたちである：

(28) “All **we** can do is rely on each other and do our best.” [Penryn and Paige & Obi and his members] (89)

例(29)は、Penrynを襲おうとするthe New Dawnというカルト団に対してPenrynは自己防衛のためとはいえ彼らに剣を振ることをためらう。このカルト団はPaly Highのキャンプでは仲間となっているからだ。Penryn対彼女を襲うカルト団の2グループである：

(29) **We** all have more than enough enemies trying to kill **us** already without going after each other. [Penryn & the New Dawn] (129)

例(30)は、Penrynがthe PitにおいてRaffeによりやく会えたところであるが、彼は自分を見てくれない。Raffe対the Watchersの2つのグループである：

(30) But he’s not looking at me. **He and the Watchers** are staring at each other as each Watcher comes out of the hovel. They position themselves in a circle around him, as though in a dream. [Raffe & the Watchers] (188)

例(31)は、上の(30)の直後のPenrynのせりふである。やはり、Raffe対the Watchersの2つのグループである：

(31) “Yeah,” I say. “I guess **you guys** know each other.” I awkwardly step back. [Raffe & the Watchers] S (188)

次は、Golden Gateでの覇権争いで、集まった人間たちが2つのグループに分かれて闘いになりそうなところでDeeとDumの双子が間に分け入って調停しようとする：

(32) “Give the masses what they want,” says Dee as they walk over to **two growing crowds** facing off with each other. [Two growing crowds] (271)

次は、Belielを通して3体のhellionがこちら側に来るが、1体はPenrynが倒し、

残る2体は後でPenrynたちからBelielを解放する。このBelielと2体のhellionの関係で2グループである：

- (33) **They** may not like each other, but they're still on the same team. [Beliel & the two hellions from the Pit] (51)

次は、「戦士の裁き」で最後にthe Pit出身の2体のhellionとBelielおよびPenrynが残り、hellionはBelielに共闘を申し入れ3対1の闘いにしようとするが、Belielはフェイントをかけ、Penrynを襲わない：

- (34) Beliel chuckles as I go back to my ready stance. **They** all had tried to double-cross each other. [Beliel & the two hellions from the Pit] (155)

例(35)は、闘いに決着がつき、Epilogue直前の第70章の最後の文である。上下の唇のペアが2つ、つまり2グループである：

- (35) My whole world turns into Raffé sensations as **our lips** explore each other. [Our lips] (328)

### 3.3 each other's

所有格each other'sは4例あり、すべて限定詞用法であり、うち(1) - (3)の3例が構成員2でPenryn & Rafféであり、(4)のmanyの1例は「連続」である。

- (1) “Right.” I nod. “**Neither of us** have any idea what it would be like to be in each other's world. Got it.” [Penryn & Raffé] S (61)

- (2) **We** look into each other's eyes. [Penryn & Raffé] (125)

例(3)は、3.1 (10), (11)と同じ場面である：

- (3) **We** fly in each other's arms in the rain over a smoldering hell. [Penryn & Raffé] (213)

次の(4)では、BelielとPenrynはhellionたちに囲まれているが、hellionはたくさんいるため、かえって一度に全員がこの二人を襲うことができないでいる。近隣で邪魔になる「連続」である<sup>12</sup>：

- (4) Our biggest advantage right now is that **the hellions** are getting in each other's

---

<sup>12</sup> 2.3 (1)と同様。

way. [The hellions] (153)

### 3.4 まとめ

ここでも相互代名詞は each other のみで、one another は現れない。構成員は1例を除いて「生物」である。ただし、この例外3.1 (6) も Raffie と彼の「天使の剣」であり、天使の剣には、記憶と意思があり、そういう意味では生物に近い。完全な無生物の例はないということになる。

構成員が2の場合は、13例あり、うち6例が Penryn を含み、そのうち4例の相手が Raffie である。

構成員が many の場合は、35例あり、「それぞれ」で近隣のグループができるもの（12例）、単純に「それぞれ」であるもの（8例）、連続（4例）、内部にグループがあるもの（3例）、2グループのもの（8例）の5つに分類できる。

所有格では、全4例中、構成員2の3例に Penryn が含まれ、残る1例は「連続」である。

出現率は、本文331ページで、each other が6.37 (331/52) である。

## 4. Conclusion

全3巻で、所有格を含めて、each other が計113例、one another は計1例であり、両者の合計は114例である。出現率は、each other だけを挙げると、総ページ数928で、8.21 (928/113) である。

所有格は、合計6例で、すべて限定詞として用いられており、所有代名詞の用例はない。また、2例が邪魔になる「連続」である。構成員数は、「連続」をふくめ many が3例で、構成員2は3例とも Penryn & Raffie である。

構成員数については、所有格を除いた107例中2者が38例で35.5%、many が69例で64.5%である。

これまでのものからの変更点として、「三三五五」(in twos and threes) を表面的な数字にとらわれない「近隣グループ」としたことである。また、「それぞれ」の定義を「構成員のそれぞれが他の構成員のそれぞれに対して」から「構成

員が不特定に他の構成員と関係している」に変えた点が挙げられる。

構成員については、ほとんどが生物であり、1.1 (6) の人間の身体が1例あり、無生物は、1.2 (10) の *houses*, 2.2 (20) の *wheeled racks of costumes*, (21) の *ribbons* の3例である。ただし、3.1 (4) の片方は天使の剣であり、普通は物体に分類されるが、記憶や意思を持ち特殊な存在で、missと言う感情を表す動詞が使われている。

### Bibliography

*Penryn & the End of Days*:

Ee, Susan. 2012. *Angelfall*. New York: Skyscape.

Ee, Susan. 2013. *World After*. New York: Skyscape.

Ee, Susan. 2015. *End of Days*. New York: Skyscape.

松島 龍太郎. 2013a. 「each other と one another の語法：お互いに交換可能か」. 『英語英文学研究』第72号（第37巻第2号）：創価大学英文学会.

松島 龍太郎. 2013b. 「each other と one another の語法 (2)： *Harry Potter* の場合」. 『英語英文学研究』第73号（第38巻第1号）：創価大学英文学会.

松島 龍太郎. 2014a. 「each other と one another の語法 (3)： *Hobbit* の場合」. 『英語英文学研究』第74号（第38巻第2号）：創価大学英文学会.

松島 龍太郎. 2014b. 「each other と one another の語法 (4)： *The Hunger Games* の場合」. 『英語英文学研究』第75号（第39巻第1号）：創価大学英文学会.

松島 龍太郎. 2015a. 「each other と one another の語法 (5)： *I Am Number Four* の場合」. 『英語英文学研究』第76号（第39巻第2号）：創価大学英文学会.

松島 龍太郎. 2015b. 「each other と one another の語法 (6)： *Howl's Moving Castle* の場合」. 『英語英文学研究』第77号（第40巻第1号）：創価大学英文学会.

松島 龍太郎. 2016. 「each other と one another の語法 (7)： *The Underworld Chronicles* の場合」. 『英語英文学研究』第78号（第40巻第2号）：創価大学英文学会.



## **Globalizing Literatures and the Global Marketplace : Hemingway and Murakami**

Mukesh Williams

### **Synopsis**

*Definitions are located within a desire, within a play of subterranean intentions negotiating the boundary of self and other. Categories traverse the history of time and geography. They are flagstuffs of ideological conquest, followed by actual possessions. Definitions and categories conquer the muted reality of civilizations through an artifice of reason. Therefore no definition is absolute, no category benign. Undoubtedly creating world literature or laying down literary standards to evaluate literature depends on the dominant cultural mood, what thinkers and critics find of abiding value during a specific era. Such standards are ethnocentric and impose categorical judgment on other literatures either through ignorance or bias. German philosophy of the late 18th century laid the foundation for the globalizing of Europe. The ascendancy of Europe in the 19<sup>th</sup> century coupled with colonization gave it unequal advantage over the rest of the world to create a muscular philosophy with overarching categories, thus universalizing its specificity. The spread of European languages and literatures saw the dominance of British English and, after World War II, American English, as the lingua franca of the world creating a global literary audience, marketplace and literary texts in English. The global marketplace has also been created inadvertently by European philosophers and literary critics who laid down standards to universalize European ideas and values. American and Japanese*

*writers inherit this global marketplace and gear their writings to cater to an Anglophonic audience and share cosmopolitan ideas and anxieties.*

Today modern writers and their progeny are aware of the globalizing power of digital technology, ideological whirligig, YouTube cinema, the English language and the Anglophonic reading public to make their works into a commercial success. Since the global reading public is huge, about 1.5 billion, authors consciously gear their theme, technique and style to suit the taste of such an audience. Modern writers share the legacy of a globalizing past especially the European past when philosophers like Emmanuel Kant and Friedrich Hegel began to universalize the specific experiences of Europe and create overarching categories to define the world. The subsequent Eurocentric bias, and the dominance of Europe, and European colonization cemented the idea of Europe as the ‘world’ and English at its center. The rise of digital technology and the spread of the internet gave an overwhelming advantage to the Anglophonic world. But the very same advantage is now changing the construction of world literature. The Institute for World Literature (IWL) at Harvard University is a leader in this direction. It does not wish to restrict world literatures to “European masterpieces” only, but also include “literary cultures” of the world.

The writings of both Ernest Hemingway (1899-1961) and Haruki Murakami (1949-present) use strategies of thematic relevance, English translation and digital technology to return to fame or globalize. Hemingway lost popularity in the 1970s due to the rise of feminism and identity politics but returned to center stage of literary fame posthumously in the late 1980s while Murakami worked meticulously with his English translators during the 1990s and 2000s to globalize his works. Hemingway is more popular today than his contemporaries such as F. Scott Fitzgerald (1896-1940) or Gertrude Stein (1874-1946), while Murakami enjoys a larger readership than Kenzaburo Oe (1935-present) or Banana Yoshimoto (1964-present). All writers who globalize subsume

an Anglophonic world of publishers and readers and hence write directly, or in translation, for such a clientele.

### **Globalizing Literature, World Literature and Global Marketplace**

Globalizing literature, world literature and the global literary marketplace are the popular phrases of modern times riding the wings of digital technology and a neo-liberal economy. Everyone is cashing on the word ‘global’ in the world. From the modern academia and publishers to global readers and writers, all seek the benefits that accrue from embracing globalization. Scholars are re-conceptualizing the three terms, global, world and marketplace, while organizations, both literary and non-literary, are using them to buttress their credentials and gain profit. The global marketplace is abuzz with digital publishing and new technological gadgets to capture the digital natives.

Globalizing literature, national literature, and world literature are all different things. Globalizing literature is a process where national literature finds a global audience in translation, often in the globally dominant language English, while world literature implies a canonical based construction where national literature from time to time escapes its geographical boundaries and begins to exist in a global literary space. In the Anglo-American world the escape of a literary text from its national moorings is aided by literary scholars and audience who find significance and abiding literary merit in it. Creating world literature or laying down standard to evaluate literature depends on the dominant cultural mood, the significant literary value and, the aesthetic temper of an age. Obviously such standards are ethnocentric and impose categorical judgment on other literatures.

Harold Bloom in *Shakespeare: The Invention of the Human* places Shakespeare at the center of the western literary canon and heaps praise on him for inventing the “human.” Bloom believes that Shakespeare creates a rational human being who can think “too well” about any “truth” he may espouse. According to him Hamlet and Falstaff are

exemplary representations of “human cognition pushed to its limits as both “think too well to survive” (Bloom, 1999 419). Some might find Bloom’s claim preposterous but it does have an element of surprise in it; it draws the attention of the reader to the category of world literature and Shakespeare. However it must be noted that a global writer possesses, either through the endorsement of literary scholars or promotion through the digital media, some popularity, locally and nationally, even before being globalized. Big publishing houses like Penguin, Random House or Harper & Collins also globalize literature just as Google and Amazon do. Contrary to the assertion made by Goethe in a letter to John Eckermann (1827) that national literature has become an “unmeaning term” and the “epoch of world literature” has arrived, national literatures continue to rule the roost (Goethe, 1998 165). Today, national literatures including indigenous movies and SNS messages go beyond national boundaries and globalize. Goethe’s hasty judgment was more of a desire and less of a fact in the early decades of the nineteenth century. In the twenty-first century as global literatures expand and transnational audience grow, national literatures continue to assert their identities. Even after the transformations on national literatures wrought by translations, global publishing and a global audience, the original identities of national literatures are not erased. Even within the conflated category of world literature, they get slotted and identified within a rubric. Also since all national and local literatures are mediated through the global lingua franca English and digital media, the translated texts and their constructed categories define their identity.

Digital media and technology may disseminate a text globally and make them popular but it takes something more for a text to become world literature. The popularity of a translated text published on digital media and a large reading public are not the only criteria defining its entry into the overarching category of world literature. J. K. Rowling’s Harry Potter series is quite popular but her “ethically rather mean-spirited” novels written in a “kid’s fantasy-school novel” style are not a part of world literature as they do not possess literary merit (Le Guin, 2004 1). Literary critics have pontificated

upon what great literature should be, and each one singles out some characteristics for texts to qualify as great literature. Wayne Booth in *The Rhetoric of Fiction* (1983) argues that the rhetoric of literature should give significance to life while F. R. Leavis in *The Great Tradition* (1948) campaigns for “openness before life” and “moral intensity.” Mathew Arnold refers to literary masters as touchstones to judge great literature. T. S. Eliot explains his idea about objective correlative, while Gustave Flaubert refers to *impassibilite* or impassioned feelings as central to great literature. Even prescribed reading lists of prestigious universities create great literature. Richard Smith believes that great literature should guide human beings through their problems by using evocative images. The global media too create hype, and movies and memorabilia further add to the hype to create world literature. Amongst the elitist circle of literary critics Rowling is not equal to J. R.R. Tolkien or Lewis Carroll as the former lacks literary merit. Obviously after 200 years of Johann von Goethe’s pronouncements, national literatures still exist from where world literature draws its resources. Today cultures are mixing faster than before creating a global presence of their local identities in English translations. The globalizing of literatures and their elevation to the category of global literature intersect many trajectories including literary merit and the global marketplace.

### **Defining and Categorizing the World**

The desire to define and categorize the world along ethnocentric lines is a function of European philosophy and culture. The role of the writer in a globalized world is both European ideology and invention that after centuries has concretized into a reality. Kant in the late 18<sup>th</sup> century transformed the specific bourgeoisie history and political freedom in Europe into a *weltrepublik* or world republic and then into a *volkerbund* or federation of nations. The role of the writer is an invention as it depends on the moral values and literary taste of the times and the position the writer wishes to take. Kant did not create European colonization or the global digital technology but he contributed to the concept of globalization as we experience today. In his essay “Idea for a Universal

History with a Cosmopolitan purpose” (1784) Kant translated the abstract concept of the universal into a concrete geopolitical world governed by modern reason. Kant’s belief in the global realization of freedom developed by Hegel’s concept of ‘world history’ encourages the logic of globalization as being the perfect space for modernity. It also creates the epistemological structure of political, economic, military and literary discourses of globalization. In the “Cosmopolitan” essay Kant also suggests that the novel could imagine the world as a totality directed by a bourgeoisie culture. “It is admittedly a strange and at first sight absurd proposition to write a history according to an idea of how world events must develop if they are to conform to certain rational ends; it would seem that only a novel could result from such premises” (Kant, 1970 51-52). Kant believes that imagining the world is the domain of philosophy but the modern novel could also play an important role in this regard. The rise of the modern novel in the 19<sup>th</sup> century represented the globalizing of bourgeois values and culture. So, philosophy imagined the world as bourgeois freedom, while the novel created the myth of modernity through its representations. The spread of the European novel through colonization of Asia and Africa further strengthened Kant’s *volkerbund* and Hegel’s world history. The image of the iconic traveler in the works of H. G. Wells, Jules Verne, Eduardo Gomez and William Dean Howells show the spread of the bourgeois culture in the world including outer space. Today the Internet is the Anglo-American outer space.

European languages also played a significant role in creating a Eurocentric bias. In the late 11<sup>th</sup> century English and French words such as *diffinicion* and *diffinition*, which meant “decision, setting of boundaries,” arose to unequally define the world. Though a definition uses a “formal” and “concise” statement to locate the meaning of a word, the act of defining itself has implications of singular control and imprint that does not allow non-European perspectives to flourish. A lot of European academic analysis suffers from this bias. R. Bin Wong points out that one of the shortcomings of Eurocentrism is its “extreme relativism” which privileges European “categories of analysis” and “dynamics

of social change.” He argues that we cannot compare just by showing “differences” between western and non-western experiences but should create experiences that are “analytically more equal” in nature (Wong 2000 2). The political and economic power of Europe in recent centuries has given it the arrogance to elide weaker cultures. Recent studies in the area endorse this thesis.

Martin Bernal’s *Black Athena* and Kenneth Pomeranz’s *The Great Divergence* show that the rise of the West was not a consequence of advances in scientific and technical knowledge in Europe, which could be traced back to Greece and Rome, but a result of scientific innovations in China and the Arab world, that Europeans eagerly took without proper acknowledgement. Wong in *China Transformed* argues that there is no unbroken western intellectual tradition and that the rise of the West was connected to the conquest of the New World which gave it a decisive advantage over China. E. A. Wrigley provides evidence that the use of coal in Great Britain was a “necessary condition” to meet the energy needs of a growing population and enabled it to break the Malthusian and food supply constraint (Wrigley, 1988 30-48). Beginning in the 19<sup>th</sup> century as Europe began to gain dominance over Asia with the use of coal to fire the industrial revolution and feed a growing urban population it also began to impose its will more aggressively on the rest of the world which set into motion a series of powerful ideas that became global.

Globalizing the novel is, therefore, connected to the colonial enterprise of European bureaucrats, politicians, religious academics and the global agencies that produce, translate and respond to the novel. In India, for example Thomas Babington Macaulay vigorously promoted the idea of British literature by opening up four universities in India which taught English literature in the English medium and cut grants to colleges which taught Sanskrit and Persian. He wanted to create a modern educated class who would be Indian in origin but English in thought and sensibility. The idea of world literature, beginning in the late 19<sup>th</sup> century, represents the cultural politics of the Anglo-American

world and the academic practices, economic expectations and cultural differences that go along with it. Big publishing houses translate only a few selected writers from different languages and cultures. But digital publishing and preordering has changed the publishing market dramatically. In the last two years Amazon Crossing is increasingly publishing translated books ushering a new era of literary marketing. However we should not assume that modern globalization is a singular and unique historical event.

### **Cosmopolitan Literature and Sanskrit Literary Space**

The phenomenon of globalization also happened at the beginning of the Common Era with the Sanskrit language and literature as it spread through the ancient public space across continents. Sanskrit created a cosmopolitan culture of world friends (*mahandriyaya* or *vishwabandhu*) with shared values of morality, sovereignty and aesthetics. It was only in the beginning of the second millennium that the hegemony of Sanskrit began to be challenged by “local speech forms” (Pollock, 2006 1). Today cosmopolitan culture functions within the trans-cultural ambience of an Anglophonic readership with predominantly liberal and modern thinking. Writing about the spread of Sanskrit literature between 6500 BC to 500 BC Sheldon Pollock calls the literature cosmopolitan literature which was a part of “literary communication that travel[ed] far, indeed, without obstruction from any boundaries at all, and, more important, that [thought] of itself as unbounded, unobstructed, unlocated” (Pollock, 2002 22). Cosmopolitan literature was more “action” oriented than “declaration” based (Pollock, 2002 17). However each reader reads a cosmopolitan text differently in space and time that Kwame Anthony Appiah calls “universalism with difference” (Appiah, 2002 202). By the 11<sup>th</sup> century writers began to, “reshape the boundaries of their cultural universe by renouncing the larger world for smaller world” (Pollock, 2002 16). The consciousness of a community gives rise to a new vocabulary defining the world.

Pollock problematizes the underpinnings of world literature and the ways it is



conceptualized in non-western cultures. Obviously most cosmopolitanism from imperial Rome and colonizing Europe to modern globalization are coercive in nature. They dislocate diasporic and migrating populations by taking them away from their familiar national moorings into a utopian world of hope and success. Some achieve success while others do not. "Cosmopolitans today are often the victims of modernity, failed by capitalism's upward mobility, and bereft of those comforts and customs of national belonging" (Breckenridge, Pollock et al, 2002 6).

Just as cosmopolitan literature conceives of itself as boundless and transcending cultures, world literature too opens up "multiple windows on the world," (Damrosch, 2003 239). Each window privileges a worldview yet each accommodating other perspectives. The world reader finds a way to empathize with the sufferings of the world embedded in the stories and joins a global reading community (Butler, 2006 38). The influence of a taste-forming reading community on a new reader is profound in terms of preferences, sympathies and assessment. But a literary text does not become a classic just through an expanding reading community.

### **What Makes a Classic?**

A classic is the foremost work of literature in every sense of the word. Charles Augustin Sainte-Beuve calls a classic writer "an old author canonized in admiration." The making of a classic is a highly subjective thing and depends upon the cultural orientation of a critic, the values of a civilization and its ethnocentric ideas. A classic is defined as a text "judged over a period of time to be of the highest quality and outstanding of its kind." A reading list of books at famous universities and colleges, such as St. John's College and Oxford University or prescribed books at Princeton University as part of official reading can also be termed as classic books. The historian Richard J. Smith writing about the Chinese classic *I Ching* or *Yijing* enunciates three criteria for a book to be called a classic. First, it must deal with "matters of great [human] importance" and provide "guidance"

to deal with them. Second, human problems should be presented in a “beautiful, moving, and memorable” manner through “stimulating and inviting” images. Third, it must be “complex, nuanced, comprehensive, and profound” hiding power and mystery. If these three criteria are present in a text, as it is in *I Ching*, the text will cut across cultural barriers and last for centuries (Smith, 2012 17). Age distills a work of art and gives it authenticity and increases its literary merit.

### **The English Victorians**

The Victorians anchored great literature in the *longue durée* of great texts. They were quite preoccupied with laying down standards to evaluate good writing especially poetry and felt literature had abiding value in preserving mankind. They were not so much concerned with globalizing British literature but, since they had an ethnocentric view of culture and the world, they undoubtedly considered the western tradition and their national literature superior to the rest of the world. Mathew Arnold had much to say about evaluating good poetry in his essay ‘The Study of Poetry’ (1880) where he talked about evaluating the literary merit of a work by comparing it to great works of literature such as those written by Homer, Dante, Shakespeare, and Milton (Arnold, 1973 165-171). The works of these writers become touchstones against which a critic should measure present works. Touchstone works also possess “high seriousness” which even great writers such as Chaucer, Dryden, Pope, and Shelley lack (Arnold, 1973 177).

Shakespeare according to Arnold falls short of the touchstone method as he concentrates too much on expression too little on conception. Arnold recommends the works of poets such as Homer and Sophocles in the ancient world, and gives great importance to Dante, Milton, Goethe and Wordsworth. Arnold singles out Wordsworth as one of the greatest poets because of his “criticism of life”. Obviously the touchstone method is a drastic shift from his earlier postulate that good literature should have action and architectonics. A reader or a critic should place a single line or a passage from the works of great poets

and compare with others. However Arnold is also conscious of the pitfalls of such a method. He cautions the reader to steer clear of two fallacious estimates of judging a literary work by locating its historical significance (historical estimate) or evaluating its personal significance (personal estimate). Falling in either of these two fallacies will prevent a reader from finding the true significance of a work. We should only apply the touchstones in literature, such as from Homer or Shakespeare, to works to find their true significance. Arnold finds the essential aspect of great poetry as “a criticism of life” and a great poet applies “ideas to life” in a “powerful” and “beautiful” manner to the question: “how to live?” Obviously with this standard Arnold comes up with three kinds of poets “good-and-great, not-so-good and not-so-great. He believes that “good literature” will always be in “currency and supremacy” as it represents the “instinct of self-preservation in humanity” (Arnold, 1973 188). But Victorian literary evaluation of great literature was also, to some extent, a part of a growing ideology of humanism that operated upon the belief of an autonomous rational self and rooted in Christian dogma. A shift in ideology and ideological concerns in the middle and late twentieth century altered the evaluation of a literary work completely.

### **Murakami and Hemingway**

With the rise of female politics in the 1970s and 1980s Hemingway went into obscurity and suffered ideological death, but soon within two decades he was resurrected by the posthumous publication of *The Garden Of Eden* (1986) a steamy story about female identity, sexual orientation, female madness, lesbianism and creativity. Murakami became popular with the publication of *Norwegian Wood* in 1987. He began to be appreciated in the West not for his positive understanding of a runaway world, but a Kafkesque vision of an alienated society, where individuals are at the mercy of relentless urban forces. Globalizing literatures is a process while world literature is a category. They both ride the wings of digital technology and the global lingua franca English. Both bring financial benefit to national and global organizations through creating an ever-expanding market

and readership. Obviously the writer and their progeny are beneficiaries too. Literatures are also globalized through the power of cosmopolitan taste-sharing audience and the authority of literary critics which may reside in a single individual or a collective body like Oxford or Princeton University. Apart from powerful agencies, interpretations of overarching literary categories are also conditioned by predominant ideology, time and cultural milieu.

A modern writer is conscious of the global Anglophonic audience and the politics of English publishing. He writes for the digital savvy bourgeoisie occupying a global space. He keeps the bare facts of suspense, sex and action to transcend cultural boundaries and cuts out the didacticism of a Dickens or an Austen. If you are writing for a multicultural audience it is always better to concentrate on the story, plot and character rather than the significance of an experience. From its beginning in the Meiji restoration of 1868, Japanese literature looked at European literature — British, German, French and Russian — for models of both cultural modernity and sophistication. Japanese writers like Junichiro Tanizaki possessed an ambivalent approach to western ideas and technology. They found it overpowering, muscling out Japanese essences but yet something interesting and new. After World War II American literature began to play an important role in shaping the sensibility and ideas of some Japanese writers such as Murakami.

### **Murakami's Global Effect**

Murakami's world of the 1960s which brought young Japanese together is now being replaced by the world of dystopia, despondency and distrust. He believes that his novels can give a hypothetical axis to the world which is spinning uncontrollably. His references are to American literature, his music is jazz and his characters dine in Denise. His global appeal is rooted in his first person point of view which reveals the urban independence and unique singularity of his characters. In an interview with John Wray in *The Paris Review* Murakami tells us that his characters choose “freedom and solitude over intimacy

and personal bonds.” He calls his style “postmodern” (Murakami, 2013 1-7).

Murakami’s global appeal lies also in his unique representation of Japanese urban culture and values. Though the West captivates his imagination, Murakami’s characters are typically Japanese and deeply rooted in the urban culture of Japan. Murakami talks about the unique rootedness of his stories in the Japanese ethos though “accessible to Westerners”. In a Joyce-an manner he leads the reader seductively through the nocturnal images of Tokyo’s love hotels and cafes in his novel *After Dark* (2004), where time collapses and expands depending on the choice characters make — “Time moves in its own special way in the middle of the night. You can’t fight it” (AD, 2007 61). In the novel the *terra firma* is always changing into a *terra incognita* where the unstable ground has “inaccessible fissures” in which unwary people fall without reprieve (AD, 2007 168). Though his characters live their lives in Tokyo they are quite global in their preferences and thinking. It is the Murakami effect during the 1980s which made American literature popular in Japan.

Taking a cue from postmodernist writers like Gabriel Garcia Marquez and Salman Rushdie, Murakami tones down his didacticism and ideology. Unlike Mishima or Tanizaki, Murakami is neither a nationalist nor an essentialist. He refuses to pass a comment on his characters allowing the reader to participate in the unraveling of the story. Murakami moves away from the traditional Japanese novel where the role of the family is central in promoting intimacy and personal bonds and concentrates on the loner and rebel seeking freedom and solitude. He also shows the comedy, fakeness, strangeness and video-game-reality of the urban world his characters live in. He uses good English translations and digital pre-ordering to his advantage. His three translators — Alfred Birnbaum, Philip Gabriel and Jay Rubin — believe that Murakami is “found in translation.” Rubin believes that Murakami has become the most ‘western’ of Japanese authors capturing a global audience cutting across cultures.

Murakami's attempt to portray the romance, comedy, angst, dystopia of urban dwellers endears him to a cosmopolitan audience. Though he has been criticized for his slavery to America, he is seen as cool and fashionable which adds to his global appeal. A fashionable garment department chain Parco which emerged in the 1980s, recently opened a bookstore that has a large section for American literature in translation and Murakami is amongst them. Murakami's knowledge of translating American writers such as Truman Capote and F. Scott Fitzgerald into Japanese helped him to understand the demands of a global readership and a global marketplace. Mukesh Williams writes that, "Murakami combines the surreal comedy of Kafka, the Fitzgeraldian angst of the lost generation, the surreal dystopia of Vonnegut, the poetic intensity of Carver, and the racy denouement of Chandler's detective pulp. He fuses this heady cocktail with western classical music like Bach, Beethoven, Brahms, Chopin, Debussy, Handel, Liszt, Mozart, Scarlatti, Schubert, Tchaikovsky, Vivaldi and Wagner and jazz like Nat King Cole, Bing Crosby, Frank Sinatra and Roger Williams" (Williams, 2013 36).

Murakami's fiction is plaintive, mystical and intriguing racing like a detective story to its surprising ending. Often his characters escape time, and his stories escape time and topography, moving through the cosmos as mutants or mythical beings suffering the reality they participate in. There is always magic in Murakami's world as he "switches the world and time that his characters inhabit and places them in another thus absolving them of any moral or legal responsibility" (Williams, 2013 37). Though Murakami alternates between being a pop artist and lone wolf he does possess a postmodernist global sensibility that is rooted within Japanese philosophy.

Murakami presents to us the loneliness of the individual in a conformist society and connects his narrative to the global lonely. He attempts to capture a past through the lyrics of a song, the signpost of a movie, the name of a novel, attempting to create a sad

nostalgia of things passing away or the *mono no aware* of life. In *Sputnik Sweetheart* (1999) the reader understands that there “exists a silent place where everything can disappear, melting together in a single, overlapping figure,” a world where we lightly touch the “many beautiful lost things” and comprehend the “fleeting” nature of our reality (*Sputnik Sweetheart*, 1999 226). He paints a psychological landscape of scenic beauty, a landscape where events and their interpretations are filled with surprise. The bewildering beauty of parallel world in his novel *IQ84* can only be assuaged by love and concern for others. Murakami creates global comparisons as his novel progresses through the streets of Tokyo with the music of Vivaldi and Leos Janacek. As the heroine Aomame speeds in her taxi to execute a wife beater the radio plays Janacek’s pipe organ music in Sinfonietta symbolizing “modern man’s fight for victory” (Williams, 2013 37). She is dressed natively in Junko Shimada suit, Charles Jourdan high heels, sun glasses and carries a 9mm Heckler and Koch automatic pistol to complete her mission, but once her mission is completed she seeks her true love Tengo. The image of a female warrior hiding a sincere loving heart is a motif repeated in literature from Grendel’s mother in *Beowulf* to Tomoe Gozen in *Heike Monogatari*.

By presenting suspenseful events without pontificating Murakami moves away from the narrow Victorian world of the western novel into an amoral post-modern world of surrealism appealing to the sensibilities of his young Japanese readers. In *The Paris Review* interview of 2013 Murakami says that he likes to “observe people” and not “judge them” or draw “conclusions” but “leave everything wide open to all the possibilities of the world.” Not judging the actions of his characters endears him to a global audience who may not understand the nuances of the Japanese tradition.

In the absence of certitude and a godless universe Murakami’s characters rely on their insight and wisdom to make sense of the world. Often they feel disembodied what Murakami calls, in *South of the Border, West of the Sun*, the “cut off sensation” when the

event-connecting chain of our consciousness is broken:

Therefore, in order to pin down reality as reality, we need another reality to revitalize the first. Yet that other reality requires a third reality to serve as the grounding. An endless chain is created within our consciousness and it is the very maintenance of this chain that produces the sensation that we are actually here, that we ourselves exist. But something can happen to sever that chain, and we are at a loss (*South of the Border*, 2000 201).

In the absence of some overarching explanation of a broken consciousness each individual must make sense of his realities. Young readers are able to understand Daliesque distortion of feeling the novel creates. Undoubtedly the world is disorganized and frenzied; Toru Watanabe in *Norwegian Wood* (2000) feels it, jazz bar owner Hajime in *South of the Border* understands it, the chain-smoking Japanese of *A Wild Sheep Chase* (1989) recognizes it, cram-school teacher Tengo Kawane in *1Q84* is bewildered by it. The blasé, amoral and chaotic world of Murakami is succinctly expressed though his dispassionate emphasis on detail without pontification.

Murakami's characters are forever grappling with their inability to express their adolescent love, finding a locus standi amidst the nostalgia of a lost world and addressing authenticity in middle age. These sentiments cut across cultures and geographies capturing a global audience. Hajime speaks for all when he confesses.

I closed my eyes, and in the darkness, whirlpools floated before me. Countless whirlpools were born and disappeared without a sound. Off in the distance, Nat King Cole was singing South of the Border ... When I opened my eyes, Shimamoto was still moving her fingers along her skirt. Somewhere deep inside my body I felt an exquisite sweet ache (*South of the Border*, 2000 15).



The Songs of Nat King Cole represent the experiences of growing up during the 1960s and 1970s in suburban middle class neighborhoods across the world. The adolescent “whirlpools” of emotions, the “sweet ache” of sexual longings may seem so very alien to a Japanese boy growing up in the 1960s but something an Anglophonic audience will immediately recognize. But we must not take Murakami literally. The story is not so much about unrequited love or nostalgia for a bygone era but about “unreliable memory, confusing sensations and alternate reality that throws individual consciousness in turmoil” (Williams, 2013 38). Murakami is not interested in a realistic representation of Japanese reality but the whirlpools of time spinning in the vortex of amoral universe. This is his Japanese and global appeal.

### **The Return of Hemingway**

When the Swedish Academy gave the Nobel Prize for literature to Hemingway in 1954 it singled out his “art of narrative” and his contemporary style reflected in *The Old Man and the Sea*, but within two decades feminist scholars were criticizing both his style and theme. During the decades of the 1970s and 1980s Hemingway lost his appeal as a popular writer and many women readers under the influence of feminist criticism left him for being phallogocentric and racist. Judith Fetterley mounted a strong attack on Hemingway’s writing pointing out to the “disparity” between Hemingway’s overt emphasis on “idealized romance” and the “radical limitations of love” in the texts; she called his writings “phallogocentric, racist, homophobic, and misogynistic” (Fetterley, 1978 48). But by the mid-1980s he was seen as a writer sensitive to gender issues (Moddelmog and der Gizzo, 2015 xxv). Wilma Garcia in *Defense of the Female in the Works of Melville, Twain and Hemingway* found his heroes completing their classical and Christian “quest” through women (Garcia, 1984 151). Lawrence Mazzeno in his book *The Critics and Hemingway, 1924-2014* explains how critics “conspired” and collaborated to create Hemingway as a “literary and cultural icon” (Mazzeno, 2015 6). Just like his protagonist

Santiago in *The Old Man and the Sea*, Hemingway was “destroyed” but not “defeated.” He returned to glory with pride and honor with the posthumous publication of *The Garden of Eden* (1986), *Under Kilimanjaro* (2005) and *True at First Light* (1999). The feminists concentrated too much on the overtly male aspects of Hemingway’s writings and missed his tightly constructed dialogues to create a certain effect. Some feminists went as far to claim that Hemingway’s dialogues did not convey the emotions he wanted to. Feminist scholars like Judith Fetterley attacked Hemingway’s writings. There were yet others who appreciated his starkly realistic finely honed prose but could not come to terms with his misogyny Hemingway did not enter the minds of his female characters; either they were agreeable or useful. Hemingway was not into gender politics, nor was he interested in understanding the constructions of masculinity or femininity. He asserted the claims of patriarchal power, hyper masculinity of bull fights, drinking, war, violence and loneliness of a dissolute life, the presence of a macho self, hiding below the iceberg beyond the battlefield after the closing of a café, beyond the dusty road into the heart of western culture.

Without the proliferation of digital technology and feminism in the 1970s and 1980s Hemingway would not have lost his popularity nor regained it in the late 1980s. Oblivious to the vagaries of his popularity Hemingway penned *The Garden of Eden* in the late 1940s which saw the light of day in the mid-1980s. Though the manuscript was rough and second-rate, Hemingway could anticipate the iconic themes of sexual gratification and unfulfilled desire during 1960s America (Meyers, 1985 436). It plays upon the biblical themes of deviance and expulsion but female jealousy dominates the story. The novel shadows F. Scott Fitzgerald’s *Tender is the Night* and takes inspiration from Rudyard Kipling’s *Jungle Book*. Hemingway factors his own relationship with Pauline Pfeiffer on their honeymoon at Grau-du-Roi in 1927. Both the barbershop “showdown” and the “lesbian link” are from Fitzgerald as Mark Spilka points out (Spilka, 1990 279-298). With feminism in decline, women readers now find themes of androgyny, gender bending, and

ménage a trios with which they can identify, though his stories continue to be told from a male perspective. Though the story has all the inexactness that Hemingway always detested it nevertheless caught the heart of readers with its light gossipy style touching the madness, cruelty and bisexuality of our times.

Though both Murakami and Hemingway belong to two different generations, Murakami was 12 years old when Hemingway died, but both received global recognition through a combination of factors ranging from changing ideology, Anglophonic marketplace and an inimitable contemporary style. Both Hemingway's progeny and Murakami's publishers are conscious of the demands of the global marketplace and a changed readership and use it to their advantage. Their works create a global readership that identifies themselves with an emotion, style or ethos and share a world of global sympathies and anxieties. For in the final analysis global literature does not just entertain but represent the confrontation of the individual with the world.

### Notes

Arnold Mathew. *English Literature and Irish Poetry*. Ed., R. H. Super ed. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1973.

Bernal, Martin. *Black Athena: Afroasiatic Roots of Classical Civilization (The Fabrication of Ancient Greece 1785-1985, Volume 1)*. Rutgers: Rutgers University Press, 1987.

Bloom, Harold. *The Western Canon: The Books and Schools of the Ages*. New York: Riverhead Books, 1995.

Fetterley, Judith. *The Resisting Reader: A Feminist Approach to American Fiction*. Massachusetts: The University of Massachusetts Press, 1978.

Garcia, Wilma. *Defense of the Female in the Works of Melville, Twain and Hemingway*. New York: Peter Lang, 1984.

Hemingway, Ernest. *The Garden of Eden*. New York: Scribner, 1995.

Le Guinn, Ursula. "Chronicles of Earthsea." *The Guardian* February 9 2004: 1-6.

- Mazzeno, Lawrence W. *The Critics and Hemingway, 1924-2014: Shaping an American Literary Icon*. New York: Camden House, 2015.
- Meyers, Jeffrey. *Hemingway: A Biography*. New York: Harper & Row, 1985.
- Moddelmog, Debra A. and Suzanne Der Gizzo, eds. *Ernest Hemingway in Context*. Cambridge: Cambridge University Press, 2015.
- Murakami, Haruki. *After Dark*, New York: Alfred A. Knopf, 2007.
- Murakami, Haruki. *South of the Border, West of the Sun*. New York: Vintage Books, 2000.
- Oxenford, John. *Conversations of Johann Wolfgang Von Goethe with Johann Peter Eckermann*. Boston: Da Capo Press, 1998.
- Pollock, Sheldon, ed. *Literary Cultures in History: Reconstructions from South Asia*. New Delhi: Oxford University Press, 2002.
- Pollock, Sheldon, et al. "Cosmopolitanisms" in *Cosmopolitanism*. Eds., Breckenridge, Carol, Sheldon Pollock et al. Durham: Duke University, 2002.
- Pollock, Sheldon. *The Language of the Gods in the World of Men: Sanskrit Culture and Power in Premodern India*. Berkeley: University of California Press, 2006.
- Pomeranz, Kenneth. *The Great Divergence: China, Europe, and the Making of the Modern World Economy*. Princeton: Princeton University Press, 2000.
- Reiss, H. S., ed. *Cambridge Texts in the History of Political Thought. Kant: Political Writings*. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Smith, Richard J. *The I Ching: A Biography (Lives of Great Religious Books)*. Princeton: Princeton University Press, 2012.
- Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. Nebraska: University of Nebraska Press, 1990.
- Williams, Mukesh. "The Intriguing World of Haruki Murakami". *Japan Spotlight*. Volume 189, May/June 2013.
- Wong, R. Bin. *China Transformed" Historical Change and the Limits of European Experience*. Cornell: Cornell University Press, 2000.
- Wray, John. "Haruki Murakami, The Art of Fiction." *The Paris Review*. 2007: 182.

<http://www.theparisreview.org/interviews/2/the-art-of-fiction-no-182-haruki-murakami>

Wrigley, E. A. "The Limits of Growth: Malthus and the Classical Economists." *Population and Development Review. Supplement: Population and Resources in Western Intellectual Traditions*, 1988: 14.



## 英語受動態の指導について

藤本 和子

1. 現行の『中学校学習指導要領』（2008）における文法の扱いについての記述には、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ…」、「文法事項の取扱いについては…実際に活用できるように指導すること」（各言語の目標及び内容等2 内容（4）言語材料の取扱い）などがある。英語指導において、コミュニケーションに役立つ実践的な文法力の養成が求められていることはいうまでもない。本稿では、学習指導要領に挙げられている文法事項のうち、受動態に焦点をあて、学習者が円滑なコミュニケーションを図ることができるよう、受動態について何を指導するとよいのかについて考察してみたい。受動態は、「受け身」として、中学校で指導されるべき言語材料の文法事項の中に挙げられている。本稿では、1) 受動態の用法について何を指導すべきかについて述べ、2) ELTの文法教材と学習者レベルをもとに、学習レベルに応じた受動態の指導内容を考察し、3) 中学校英語検定教科書（全6社）の受動態の導入法について比較調査することにより、受動態指導の留意点を示唆することを目的とする。

2. 受動態の従来の指導法の問題点について、Granger (2013: 5)には以下のようにある。

For a long time – and still today in some cases – descriptions of passive structures were primarily based on intuition and the focus was mainly, if not exclusively, on the structural aspect of the passive, i.e. the active-passive transformation (*the local*

---

<sup>1</sup> 本稿では、『中学校学習指導要領』の記述に沿った箇所以外では、「受け身」ではなく、「受動態」という用語を使用する。

*authority built the house / the house was built by the local authority) . . .*

この記述から、従来、能動態と受動態の指導においては、両者の形態の書き換えや言い換えに指導の重点が置かれていたことが分かる。能動態と受動態の変換練習は、学習者が受動態の形態を学ぶには役立つかもしれない。しかしながら、受動態の形態を習得するのみでは、実際のコミュニケーションの中で受動態を効果的に用いることはできないであろう。Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999: 355) も、このような従来の能動態と受動態の形態の違いについての教授にとどまる指導法を批判し、能動態と受動態のそれぞれの形態が用いられる理由があることについて次のように述べている。

Early transformational grammar accounts and many ESL/EFL texts tended to treat the passive voice as if it were a syntactic variant of the active voice. We have attempted to argue against this characterization of the passive. In fact, use of the two voices is motivated by different reasons. . . . [I]t is misleading to students to present the passive as if it were derived from the active voice.

受動態の指導では、受動態の形態についてのみではなく、どのような場合に受動態を用いるとよいのか、つまり、‘how to form the passive’のみでなく、‘when to use the passive’について指導を行うことが必要であるといえよう。

3. 能動態と受動態は何が異なるのだろうか。受動態について、受動態が用いられる理由を見てみよう。

3.1 主要な文法書を比較すると、受動態が用いられる場合について、明確な記述の一致が見られる。つまり、能動態と受動態では、行為者について、話し手や書き手の情報提示の仕方が異なる。例えば、Biber et al. (2002: 166) は、‘They [Passive verb phrases] reduce the importance of the agent of an action . . .’と述べているが、こ



のことは、Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999: 347) の ‘[T]he passive “defocuses” the agent’ と一致する。さらに、Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999: 347) は、これを受動態の ‘core meaning’ としている。そして、‘focus’ をキーワードとするならば、Hands (2011: 406) は、受動態の使用について以下のように記述している。

[Y]ou could report the same event by using an active form of a verb, as in *The dog has eaten our dinner* or by using a passive form of a verb, as in *Our dinner has been eaten by the dog*, depending on whether you wanted to focus on the dog or your dinner.

Hands (2011: 405-406) によると、同じ出来事について述べる場合でも、*the dog* に焦点を置くならば、能動態の *The dog has eaten our dinner* が用いられ、*our dinner* に焦点を置く場合には、受動態の *Our dinner has been eaten by the dog* が用いられることになる。Folse (1999: 243-244) では、能動態の文の主語について、‘topic’ という表現を用いて説明している。Folse (1999: 243) の以下の例文を見てみよう。

1. The people of France gave the Statue of Liberty to the United States.
2. Leonardo da Vinci painted the famous *Mona Lisa*.
3. We will make a decision about our trip soon.
4. The people reelected George Washington for a second term in 1792.
  
5. The Statue of Liberty was given to the United States by the people of France.
6. The famous *Mona Lisa* was painted by Leonardo da Vinci.
7. A decision about our trip will be made soon.
8. George Washington was reelected for a second term in 1792. (下線筆者)

Folse (1999: 243-244) によると、能動態の用例(1)-(4)では、‘the most important topic’ は、‘the person or thing that is doing the action (the “doer” of the action)’ (「行為

者」)であり、いずれも下線を付した文の主語が、‘the agent of the action’である。一方、受動態の用例(5)-(8)では、下線部の主語は、‘the agent of the action’ではなく、‘the person or thing that “receives” the action of the verb’ (「行為の受け手」)である。これらのことから、受動態と能動態は、「行為者」への言及の仕方が異なる表現であることが分かる。

3.2 受動態の文中での *by + agent phrase* の有無について見てみよう。Folse (2009: 244-245) は、受動態の文中の *by + agent phrase* の使用について、‘You should not name the agent when it is not new information or when the agent is not important’ (p.244). と述べ、3.1 の受動態の例文(8)において、ここでは、能動態の用例(4)の主語であった *the people* を用いた *by + agent phrase* 付きの(9)のような用例は、‘unconventional’ であるとしている。つまり、大統領が人々つまり、国民によって選ばれるのは当然であり、*by the people* は new information を伝えておらず、省略しうると述べている。

9. ? President Washington was reelected by the people for a second term in 1792.

(下線筆者) (Folse 2009: 245)

受動態の文中に *by + agent phrase* が用いられる頻度について、Leech (2001: 6)、及び Biber et al. (2002: 167) のコーパスデータ分析によると、*by + agent phrase* が用いられない受動態 (‘short passives’, ‘agentless passives’) のほうが、*by + agent phrase* が用いられる受動態 (‘long passives’) よりも、頻度が6倍高い。この頻度情報をもとに、Leech (2001: 6) は、受動態の指導について以下のように提案をしている。

The ‘short passive’ without agent is structurally simpler, and this would lead one to suppose that it is easier to learn how to use [sic] than the ‘long passive’ with agent. This suggests that, contrary to what is often assumed, the short passive should be given

teaching priority over the long passive, on grounds of both frequency and learnability.

これは、受動態の文で行為者が言及されない頻度のほうが高いことと、*by* + agent phrase が使用されない形態のほうが短く、学習者には、学びやすいことから、受動態の指導においては、*by* + agent phrase が付かない形態を優先的に教授する指導法である。Leech (2001: 6) の指導法の提案に従うならば、受動態の指導において、*by* + agent phrase の使用においては、「どのような場合に受動態の文において *by* + agent phrase が用いられないか」ではなく、「どのような場合に受動態の文において *by* + agent phrase が用いられるか」という観点からの指導がなされる必要があるだろう。

前者の「どのような場合に受動態の文において *by* + agent phrase が用いられないか」については、多くの文法書や文献において記述が見られる。ここでは、Hands (2011: 406) の記述を紹介しよう。

- a. because you do not know who or what the performer<sup>2</sup> is

*He's almost certainly been delayed.*

*The fence between the two properties had been removed.*

- b. because it is not important who or what the performer is

*I was told that it would be perfectly quiet.*

*Such items should be carefully packed in boxes.*

- c. because it is obvious who or what the performer is

*She found that she wasn't being paid the same salary as him.*

*... the number of children who have been vaccinated against measles.*

- d. because the performer has already been mentioned

*His pictures of dogs were drawn with great humour.*

*The government responded quickly, and new measures were passed which strengthened*

---

<sup>2</sup> 同書第2版では、'performer'ではなく、'agent'が用いられていたが、第3版では'performer'が用いられている。学習者が用語を理解しやすいようにとの教育的配慮であろう。

*their powers.*

e. because people in general are the performers

*Both of these books can be obtained from the public library.*

*It is very strange and has never been clearly explained.*

f. because you do not want to say who performed an action, or you want to distance yourself from your own action.

*The original has been destroyed.*

*I ve been told you wished to see me.* (下線原典)

これらの *by* + agent phrase が用いられない理由を見ると、行為者が不明である、重要ではない、明瞭である、すでに言及されている、一般の人々である場合や、行為者について言及を避ける場合であることが分かる。いずれの場合も、行為者に焦点が置かれない場合である。

次に、「どのような場合に受動態の文において *by* + agent phrase が用いられるか」について、Biber et al. (2002) と Downing and Locke (2002) をもとに、「情報の流れの原則 (the information-flow principle)」、「文末焦点の原則 (the end-focus principle)」そして「文末重心の原則 (the end-weight principle)」の観点から見てみよう。

英語は、通例、旧情報 (given information) から新情報 (new information) へという情報提示の流れの原則を持つ。つまり、話し手と聞き手、あるいは書き手と読み手の間の暗黙の了解である旧情報が、文のはじめのほうに、そして、新しく重要な情報が、文の後方に置かれるという原則である。次の対話を見てみよう。

10. A. Where did you get that silver bangle?

B. It was given to me *by my BOY-friend*. (Downing and Locke 2002: 252)

(10B)において、*It* は *that silver bangle* のことであり、ここでは旧情報を表しており、*by my BOY-friend* により、新情報である行為者が表されるとともに、文末

焦点の原則が働いている。<sup>3</sup> さらに、例文(11)のように、行為者が長い場合、長いものは文の後方へという文末重心の原則が働き、受動態が用いられ、by + agent phraseによって行為者が表される場合がある。

11. The front seats were filled by *members of the families of the victims*.

(Downing and Locke 2002: 253)

新情報は重要な情報を伝達するために、旧情報より長くなる傾向があるとされるが (cf. Biber et al. 2002: 169)、上記の3つの原則は互に関連性があることが分かる。これら3つの原則は原則であって、文法規則ではないことから、実際の英語使用がこれらの原則に従わない場合も当然あるが、学習者が、典型的な英語の情報伝達法を認識しておくことは非常に重要であると考ええる。

3.3 能動態と受動態の使用について、談話の流れにおける結束性の観点から考えてみたい。円滑なコミュニケーションには、結束性を持つ一貫した発話や記述が要求される。3.2の対話の例(10)に見られるように、(10B)の主語 *It* は、(10A)の *that silver bangle* を受けており、結束性が保たれるとともに、旧情報から新情報へと情報が流れていることが分かる。以下の Downing and Locke (2002: 256) の用例(12a)から(14c)を見てみよう。いずれも、(a)の後に、(b)よりも(c)が続くほうが自然な流れとなる。

12 a. The Prime Minister stepped off the plane.

12 b. Journalists immediately surrounded her.

12 c. She was immediately surrounded by journalists.

---

<sup>3</sup> Downing and Locke (2002: 252-253)によると、話し言葉では、'pitch' や 'stress' が伴うので、(10B)のように受動態を用いなくとも、*My BOY-friend gave it to me.* の *My BOY-friend* を強く発音することによって新情報を提示することができる。このことから、受動態は音声の伴わない書き言葉で効果的に使用される。

13 a. The Prime Minister stepped off the plane.

13 b. The wind immediately buffeted her.

13 c. She was immediately buffeted by the wind.

14 a. The Prime Minister stepped off the plane.

14 b. All the journalists were immediately greeted by her.

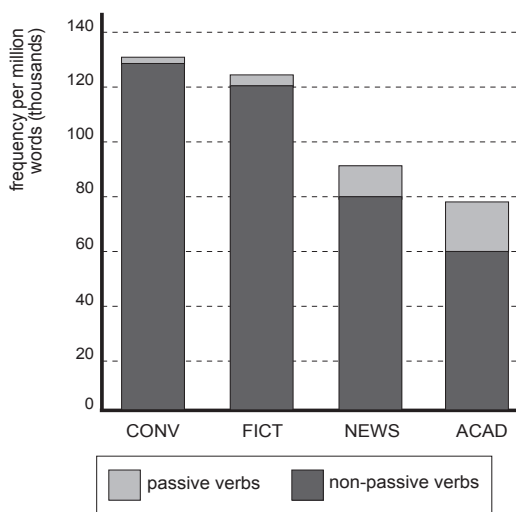
14 c. She immediately greeted all the journalists.

(12c)と(13c)では、受動態が用いられ、(14c)では、能動態が用いられていることに注目したい。(12a)、(13a)、(14a)の*The Prime Minister*というトピックが、(12c)、(13c)、(14c)において、*She*で受け継がれることにより、文と文に自然なつながりがある。このことは、能動態と受動態の選択を考える上でも重要であるといえよう。

3.4 次に、能動態と受動態のレジスター（言語使用域）別の使用頻度を見てみよう。Biber et al. (2002: 168)から抜粋したFigure 1によると、受動態は、academic proseとnewsにおいて、conversationよりも頻度が高いことが顕著である。Fictionは、書き言葉と話し言葉の両方の性質を持っている。受動態の頻度が、academic proseとnewsにおいて高い主たる理由の一つに、行為者の明示の必要性の低さが関係している。一方、conversationでは、行為者の行動について述べるために能動態を用い、行為者を主語として明示する傾向がある。

3.5 ここまで、文献の記述に従って、能動態と受動態の違いや、どのような場合に受動態が使用されるのかについて論じてきた。受動態の使用の目的は、「焦点移動」によって行為者に焦点をあてないことである。ただし、行為者が新情報として言及される必要がある場合には、*by + agent phrase*によって表される。受動態の文では、*by + agent phrase*が用いられない頻度のほうが高い。受動態、そして、受動態の文に*by + agent phrase*が用いられる場合については、「情報の流れ」、

Figure 1: Frequency of finite passive v. non-passive verbs across registers



(Biber et al. 2002: 168)

「文末焦点」そして「文末重心」の原則から述べた。さらに、「情報の流れ」の法則には、談話の流れから見る「結束性」が関係していることにも触れた。また、受動態は、話し言葉よりも書き言葉において頻度が高いことについて見た。なお、本稿では、「焦点移動」という表現を用いる。3.1において、Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999: 347) は、'[T]he passive "defocuses" the agent'. のように、'defocus' という表現を用いており、これは、「…の焦点をぼかす」の意味であるが、受動態の文で、行為者が、*by* + agent phrase で表され、重要な新情報を伝える場合もあることを考慮して、本稿では、「焦点移動」という表現を用いることにした。

4. 第3章にもとづき、受動態の使用について指導すべきこととして、ここでは、「焦点移動」、「*by* + agent phrase の有無の頻度情報」、「レジスターについての頻度情報」の3つに注目をしてみよう。第1章で述べたように、『中学校学習指導要

領』において、受動態（受け身）は中学校で指導する文法事項の中に挙げられている。本章では、「焦点移動」、「*by + agent phrase*の有無の頻度情報」、「レジスターについての頻度情報」が、学習者のどのレベルで指導されるべきかヒントを得るべく、ELTの文法教材を参考にしながら考察してみよう。ここでは、Basic、Intermediate、Advancedの3つにレベル分けをされた*Oxford Practice Grammar*（以下*OPG*）の記述を分析する。

*OPG*の3つのレベルが対象とする学習者のCEFRレベルは、*OPG Basic*は、A1からB1レベル、*OPG Intermediate*は、B1からB2レベル、*OPG Advanced*は、C1からC2レベルである。CEFRレベル、*OPG*の対照とする学習者レベルと日本の学生の英語レベルの対照目安はTable 1のようになる。<sup>4</sup> *OPG Basic*が、日本の中学生から高校生レベルに渡っていることが分かる。

Table 1: CEFR レベル目安

CEFR	学生	<i>OPG</i>
A1	小学生～中学生	Basic
A2	中学生～高校生	Basic
B1	高校生	Basic/Intermediate
B2	高校生～大学生	Intermediate
C1-C2	大学生以上	Advanced

*OPG*の3つのレベルの受動態についての記述を分析することにより、受動態の何について、どのレベルで指導すべきか、一つの参考としたい。Table 2は、「焦点移動」、「*by + agent phrase*の有無の頻度情報」、「レジスターについての頻度情報」が*OPG*の3つのいずれのレベルで扱われているか調べた結果をまとめたものである。

<sup>4</sup>「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) – ブリティッシュ・カウンシル」2015 British Council 日本. Available at [https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/jiao\\_cai\\_nonan\\_yi\\_du\\_tocefrying\\_yu\\_li\\_jian\\_ding\\_shi\\_yan\\_0.pdf](https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/jiao_cai_nonan_yi_du_tocefrying_yu_li_jian_ding_shi_yan_0.pdf) (accessed 30 Dec 2015) 参照。



Table 2: OPGにおける受動態の記述

	<i>OPG Basic</i>	<i>OPG Intermediate</i>	<i>OPG Advanced</i>
焦点移動	+	+	+
by + agent phrase の有無の頻度情報	(+)	+	+
レジスターについての 頻度情報	—	+	+

+は、記述があることを、—は、記述が無いことを表す。(+)は、関連した記述があることを表す。

Table 2によると、能動態と受動態の「焦点」の違いについては、3つのすべてのレベルで説明がなされている。このことから、能動態と受動態の違いとして、前者では、「焦点」が主語である行為者に置かれるのに対して、受動態では、行為者が重要ではないなどの理由で言及されないか、あるいは、行為者について述べる必要がある場合には、それを *by + agent phrase* によって表すことは、学習者に指導すべき重要な点であるといえよう。「*by + agent phrase*の有無の頻度情報」について、*OPG Basic*、*OPG Intermediate*と*OPG Advanced*の記述は、受動態の文で、どのような場合に行為者が言及されるかという観点から記述がなされている。*OPG Basic*には、*by + agent phrase*が付く場合とそうでない場合の頻度の違いについての明確な情報は掲載されていないが、*OPG Intermediate*には、‘In a passive sentence, we sometimes mention the agent (the person or thing doing the action). We use **by** with the agent’ (下線筆者) (p. 134).、*OPG Advanced*には、‘In passive sentences, we don’t usually mention the agent’ (下線筆者) (p. 64). という説明があり、受動態の文において、*by + agent phrase*が付かない場合のほうが通例であることが分かる。「レジスターについての頻度情報」は、*OPG Intermediate*と*OPG Advanced*に記述がある。*OPG Intermediate*には、受動態の頻度は、話し言葉と書き言葉では、書き言葉においてより高いことや、ニュースレポートにおいてもよく用いられることなどが述べられている。*OPG Advanced*では、受動態は、一般的な情報を個人の感情を入れずに伝えるあらたまった書き言葉で用いられる傾向にあることなどが述べられている。*OPG Intermediate*と*OPG Advanced*から、それぞれ記述を

引用しておこう。

We use the passive in both speech and writing, but it is more common in writing. We see it especially in textbooks and reports. We use it to describe activities in industry, science and technology, and also for official rules. . . . The passive is also often used in news reports.  
(下線筆者) (*OPG Intermediate*: 134)

We often use passives when general information is presented in an impersonal way (not intended for a particular person). For example, passives are often used in rules and warning notices, in descriptions of procedures, especially in research reports, and other types of formal written reports where personal reference (I, we) is typically avoided. . . . We can use passives when we want to avoid personal commands and to avoid implying that we are only talking about ourselves or our personal actions.  
(下線筆者) (*OPG Advanced*: 62)

「焦点移動」、「by + agent phraseの有無の頻度情報」、「レジスターについての頻度情報」の3つの項目をすべて扱っているのは、*OPG Intermediate*と*OPG Advanced*であることから、受動態は、*Basic*レベルで導入され、*Intermediate*、*Advanced*レベルにおいて、「焦点移動」、「by + agent phraseの有無の頻度情報」、「レジスターについての頻度情報」などを統合的に取り入れて指導が行われる文法項目であるといえようか。つまり、Table 1では、CEFR A1レベルは、小学生からとなっているが、2016年現在の日本では、まだ小学校で英語が教科となっていないため、受動態が、中学校で導入された後、高校、大学レベルに渡って指導することになる。受動態の指導が*Basic*レベルで容易にすまされるものでないことは、CEFRレベルと*OPG*の3つのレベルの文法書の説明内容及び、Folse (2009)の次の記述からも明瞭であろう。Folse (2009: 250-251)は、‘Passive voice is not for beginners. . . . Passive voice is often taught in intermediate classes’. と述べてい

る。<sup>5</sup>

「焦点移動」、「情報の流れ」、「文末焦点」そして「文末重心」は、互いに関連するといえよう。例えば、*OPG Intermediate*では、*by + agent phrase*によって行為者が表される場合について、‘The new information about the subject comes at the end of the sentence’ (p. 132). のように、新情報が文末に置かれることを明確に述べている。さらに、*OPG Intermediate* は、文脈の中で、能動態と受動態の使用の違いを説明することにより、文が何について述べられているのかということや、新情報が文末に置かれていることを説明するために、能動態が用いられた用例(15)と、受動態が用いられた用例(16)を比較している。

#### 15. Alexander Graham Bell

A British inventor who went to live in Canada and then the USA. Bell invented the telephone.

#### 16. Telephone

An apparatus with which people can talk to each other over long distances. The telephone was invented by Alexander Graham Bell.

(下線筆者) (*OPG Intermediate*: 132)

(15)は*Bell*について、(16)は*the telephone*について述べられており、新情報は、(15)では*the telephone*であり、(16)では*Bell*である。さらに、文脈の中で、能動態と受動態のいずれを用いるかについて、*OPG Intermediate*のテスト (p. 143) において、談話における旧情報と新情報の提示の仕方、結束性を問う練習問題が掲載されている。以下に2例のみ紹介する。

17. Our neighbours have got a cat and a dog.

---

<sup>5</sup> ただし、Folse (2009: 250-251)は、学習者のレベルを、beginning、intermediate、upper-intermediate、advancedのように、upper-intermediateを入れた4レベルに分けている。

- a) A lot of mice are caught by the cat. b) The cat catches a lot of mice.

18. Last night Martin dreamt he saw his dead grandmother.

- a) A white dress was being worn by the ghost. b) The ghost was wearing a white dress.  
(下線筆者) (OPG Intermediate: 143)

(17)と(18)において、選択肢に能動態と受動態が与えられており、いずれもb)の能動態の文が、第1文に後続する。(17)では、第1文中の *a cat* が、b)において *The cat* のように旧情報として主語で用いられ、(18)では、第1文中の *his dead grandmother* がb)では *The ghost* と言い換えられ、旧情報として主語として用いられている。このような練習は、学習者が、新情報と旧情報の提示の仕方を考えながら、談話の流れの中での能動態と受動態のいずれを使用するほうが、より自然であるか理解するのに有意義であろう。

5. この章では、中学校の英語検定教科書（全6社）の受動態の記述について比較分析を行う。

第2章で見たように、日本の中学生レベルは、OPGでは *Basic* であるので、Table 2からすると、能動態と受動態の違いについて、少なくとも「焦点移動」について指導することが1つの目安となるだろう。

中学校の教科書名は匿名性とし、6社それぞれから出版されたものを、教科書Aから教科書Fのように表示する。調査するのは、それぞれの出版社の第1学年から第3学年の教科書合計18冊である。調査項目は、受動態がはじめて導入される学年及び、第4章の「焦点移動」、「*by + agent phrase*の有無の頻度情報」、「レジスターについての頻度情報」の3つに加え、教科書ではじめて提示されている受動態の例文が、*by + agent phrase* 付きのものであるか、そうでないかについても調べてみよう。

受動態がはじめて導入される学年は、教科書A、B、D、Eでは第2学年で、そのうち、教科書B、D、Eでは、第3学年の最初の課で受動態を復習できるよう編

集されている。教科書C、Fでは第3学年である (Table 3 参照)。

Table 3: 受動態がはじめて導入される中学校学年

	教科書A	教科書B	教科書C	教科書D	教科書E	教科書F
学年	2	2	3	2	2	3

注目したいのは、受動態の導入の仕方は、6種類の教科書のうち、教科書Bを除くすべての教科書において、はじめて受動態の文を例示する際に、それに対応する能動態の文を併記していないという点である。さらに、6種類の教科書すべてにおいて、能動態と受動態の単なる書き換えや言い換えのような説明記述はなされていない。日本の中学校の検定教科書においては、第2章のGranger (2013) と Celce-Murcia and Larsen-Freeman (1999) で指摘されたような従来の受動態指導の問題点が考慮され、改善されているといってよいのではないだろうか。ただし、能動態と受動態の違いを説明する際には、能動態と受動態の文を比較して、両者は何が異なるのかについて説明することも、能動態と受動態の違いについて、学習者の理解を助けることも否定できないであろう。6種類の教科書に共通して見られる受動態の説明記述には、例えば、『「～される」』、『「～されている」』というときは、『be動詞 + 過去分詞』で表す』のような日本語の意味とともに受動態の形態の紹介がある。

Table 4 は、第4章で、OPGのレベル別に分析した「焦点移動」、「by + agent phraseの有無の頻度情報」、「レジスターについての頻度情報」の扱いについてである。OPGのBasicレベル（中学生から高校生対象）で扱われていた「焦点移動」は、6種類の教科書のうちの半数、つまり、教科書B、D、Fで説明がなされている。「焦点移動」は、能動態と受動態の違いの重要な点であり、今後、すべての中学校の教科書で説明がなされてもよいのではないかと考える。「by + agent phraseの有無の頻度情報」については、いずれの教科書も、受動態にby + agent phraseが付く文と付かない文のどちらの頻度が高いのかについての記述は見られない。教科書B、D、E、Fの、行為者に言及したり、行為者を明示するときや

強調するときには、*by + agent phrase* が用いられるといった記述や、教科書 B、D、F の、*by + agent phrase* が用いられない場合として、行為者が不明な場合や、明示する必要がない場合といった説明にとどめられている。今後、Leech (2001) や Biber et al. (2002) の *by + agent phrase* が付かない受動態が *by + agent phrase* 付きの受動態よりも頻度が高いといった頻度情報が掲載されてもよいのではないだろうか。「レジスターについての頻度情報」については、*OPG Intermediate* レベル以上で扱われていたが、いずれの中学校教科書にも明確な記述説明はなされていない。

Table 4: 中学校英語検定教科書における受動態の記述

	教科書 A	教科書 B	教科書 C	教科書 D	教科書 E	教科書 F
焦点移動	－	＋	－	＋	－	＋
<i>by + agent phrase</i> の有無の頻度情報	－	(＋)	－	(＋)	(＋)	(＋)
レジスターについての頻度情報	－	－	－	－	－	－

＋は、記述があることを、－は、記述が無いことを表す。(＋)は、関連した記述があることを表す。

Table 5 は、教科書においてはじめて紹介される受動態の例文（本文中ではなく、文法説明のために提示された初出の例文）が、*by + agent phrase* が付いたものか、そうでないものであるのか調査した結果である。教科書 C 以外の教科書では、*by + agent phrase* が付いていない用例が最初に提示されており、受動態の文において、*by + agent phrase* が付かない頻度のほうが高いという言語事実を反映しているといえようか。教科書 C のみが、*by + agent phrase* 付きの例文を最初に提示するとともに、Table 4 で見たように、教科書 C には、「*by + agent phrase* の有無の頻度情報」について、あるいはそれに関連する記述がないが、今後、*by + agent phrase* の使用頻度についての説明が取り入れられてもよいのではないだろうか。参考までに、『中学校学習指導要領解説』には、「受け身は、以下のようなものを指導する」として、以下の 5 つの例文が提示されている (Judo is enjoyed by many people in the world./English is spoken around the world./This machine was made in France./A

new gym will be built here./We will be given new textbooks next year.)。ここでは、*by* + agent phraseが付いた例文が最初に挙げられているが、受動態が用いられる目的や*by* + agent phraseが用いられる理由や頻度を考えれば、教科書Cを除く5種類の教科書のように、*by* + agent phraseが付かない用例から導入し、どのような場合に*by* + agent phraseを用いて行為者が表されるのか説明するほうが、実際の英語使用を反映した指導法であると考ええる。

Table 5: 中学校英語検定教科書における受動態の例文中の*by* + agent phrase

	教科書A	教科書B	教科書C	教科書D	教科書E	教科書F
第1番目の例文に <i>by</i> + agent phraseが用いられている			✓			

該当する教科書に✓を入れている。

その他、*OPG Intermediate*でなされているような、文脈の中で能動態と受動態の使用について説明する指導法も重要であろう（第4章）。中学校教科書では、教科書D（2年生用教科書p. 120）において、(19)と(20)のように、それぞれ関連あるいは、連続する2文を用いて、受動態の文が「視点」の観点から説明されている。つまり、受動態の文は、「行為の受け手」の視点から出来事や行為について述べる事が説明されている。

19. Your son broke my kitchen window this morning. Look, this window **was broken** by your son.

20. I bought this picture yesterday. It **was painted by** a young painter. （下線筆者）

学習者のレベルと学習負担を配慮しながらではあるが、(19)と(20)において、なぜ第2文で受動態が用いられているのかについて学習者に考えさせることにより、結束性や談話の流れの指導にもつなげていくことができるであろう。(19)では、第1文の *my kitchen window* が、第2文で *this window* で、(20)では、第1文

の *this picture* が第2文において *It* で受けられ、第2文の主語が旧情報を伝えている。つまり、それぞれの第2文において、受動態を用いることにより、結束性や談話の流れが保たれている。<sup>6</sup>

6. 受動態の指導内容については、その他、受動態と時制、受動態と助動詞、受動態をとりやすい動詞と、とりにくい動詞、*get* + 過去分詞の用法、過去分詞と形容詞の区別など指導すべき事柄が多くあることはいうまでもない。

コーパス言語学の研究の成果により、会話や学術論文等のようなレジスター（言語使用域）の違いによる受動態の使用頻度や、受動態をとりやすい動詞、とりにくい動詞などの情報が、文法書や文献に掲載されるようになっている。本稿では、中学校の教科書に限定して調査をしたが、高等学校から大学までのカリキュラムの中で、受動態は、初級学習者から上級学習者まで、十分な、かつ実用的な指導がなされる必要がある文法事項といえよう。

### Acknowledgements

この論文は、科学研究費補助金の交付を受けて行った研究成果の一部である (JSPS KAKENHI Grant Number JP25370654)。

### References

- Biber, D. et al. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.  
Biber, D. et al. 2002. *Longman Student Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.  
Birch, B. 2014. *English Grammar Pedagogy*. New York: Routledge.  
Celce-Murcia, M. and Larsen-Freeman, D. 1999. *The Grammar Book*. 2nd ed. Boston: Heinle & Heinle.  
Coe, N. et al. 2006. *Oxford Practice Grammar Basic*. Oxford: Oxford University Press.

<sup>6</sup> 教科書Dが、調査したその他の教科書と異なるのは、Horyuji **was built** in 607. (3年生用教科書p. 6)のような用例を用いて、「建物が『いつ建てられたか』に焦点を当てた言い方です。」のように述べ（同教科書p. 6）、文末において、*by* + agent phrase以外のものにも焦点が当てられるといった「文末焦点」からの説明がなされている。本稿では、文末において *by* + agent phrase以外のものに焦点が当てられることについては言及しなかったが、Downing and Locke (2002: 254-255)などが参考になる。



- Downing, A. and Locke, P. 2002. *A University Course in English Grammar*. New York: Routledge.
- Eastwood, J. 2006. *Oxford Practice Grammar Intermediate*. Oxford: Oxford University Press.
- Folse, K. 2009. *Keys to Teaching Grammar to English Language Learners*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Granger, S. 2013. 'The Passive in Learner English: Corpus Insights and Implications for Pedagogical Grammar'. *Learner Corpus Studies in Asia and the World*, 1: 5-15.
- Halliday, M. and Hasan, R. 1976. *Cohesion in English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Hands, P. (ed.) 2011. *Collins COBUILD English Grammar*. 3rd ed. Glasgow: HarperCollins Publishers.
- Hinkel, E. and Fotos, S. (eds.) 2002. *New Perspectives on Grammar Teaching in Second Language Classrooms*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers.
- Leech, G. 2001. *The Role of Frequency in ELT: New Corpus Evidence Brings a Re-appraisal*. In *ELT in China 2001: Papers presented at the 3rd International Symposium on ELT in China*. Foreign Language Teaching and Research Press, Beijing, pp. 1-23.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow: Longman Group UK Limited.
- Sinclair, J. (ed.) 2005. *Collins COBUILD English Grammar*. 2nd ed. Glasgow: HarperCollins Publishers.
- Thornbury, S. 1999. *How to Teach Grammar*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Yule, G. 2006. *Oxford Practice Grammar Advanced*. Oxford: Oxford University Press.
- Columbus 21 English Course1*. 2015. 東京：光村図書出版. (2011年検定済)
- Columbus 21 English Course 2*. 2015. 東京：光村図書出版. (2011年検定済)
- Columbus 21 English Course3*. 2015. 東京：光村図書出版. (2011年検定済)
- New Crown English Series 1*. 4th ed. 2015. 東京：三省堂. (2011年検定済)
- New Crown English Series 2*. 4th ed. 2015. 東京：三省堂. (2011年検定済)
- New Crown English Series 3*. 4th ed. 2015. 東京：三省堂. (2011年検定済)
- New Horizon English Course 1*. 2015. 東京：東京書籍. (2011年検定済)
- New Horizon English Course 2*. 2015. 東京：東京書籍. (2011年検定済)
- New Horizon English Course 3*. 2015. 東京：東京書籍. (2011年検定済)
- One World English Course 1*. 2015. 東京：教育出版. (2011年検定済)
- One World English Course 2*. 2015. 東京：教育出版. (2011年検定済)
- One World English Course 3*. 2015. 東京：教育出版. (2011年検定済)
- Sunshine English Course 1*. 4th ed. 2015. 東京：開隆堂出版. (2011年検定済)
- Sunshine English Course 2*. 4th ed. 2015. 東京：開隆堂出版. (2011年検定済)
- Sunshine English Course 3*. 4th ed. 2015. 東京：開隆堂出版. (2011年検定済)
- Total English 1*. 2015. 東京：学校図書. (2011年検定済)
- Total English 2*. 2015. 東京：学校図書. (2011年検定済)
- Total English 3*. 2015. 東京：学校図書. (2011年検定済)

- 『中学校学習指導要領』2008. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/\\_\\_\\_icsFiles/afiedfile/2010/12/16/121504.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/___icsFiles/afiedfile/2010/12/16/121504.pdf) (accessed 31 December 2015).
- 『中学校学習指導要領解説 外国語編』2008. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afiedfile/2011/01/05/1234912\\_010\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afiedfile/2011/01/05/1234912_010_1.pdf) (accessed 31 December 2015).
- 『中学校学習指導要領英訳版(仮訳)』2010. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298356.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298356.htm) (accessed 31 December 2015).
- 『高等学校学習指導要領』2009. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afiedfile/2011/03/30/1304427\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afiedfile/2011/03/30/1304427_002.pdf) (accessed 31 December 2015).
- 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』2009. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_\\_icsFiles/afiedfile/2010/01/29/1282000\\_9.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/___icsFiles/afiedfile/2010/01/29/1282000_9.pdf) (accessed 31 December 2015).
- 『高等学校学習指導要領英訳版(仮訳)』2010. 文部科学省. Available at [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298353.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/eiyaku/1298353.htm) (accessed 31 December 2015).
- 「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) – ブリティッシュ・カウンシル」2015 British Council 日本. Available at [https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/jiao\\_cai\\_nonan\\_yi\\_du\\_tocefrying\\_yu\\_li\\_jian\\_ding\\_shi\\_yan\\_0.pdf](https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/jiao_cai_nonan_yi_du_tocefrying_yu_li_jian_ding_shi_yan_0.pdf) (accessed 30 December 2015).

## 編集後記

今回は3人の先生方が投稿していただいた。心から感謝を申し上げる。

この論集が電子化されてから3号目となる。本という形と厚さのあるものに長年慣れてきた人間にとって、電子化された論文はパソコンの画面の中のみ存在するもの、つまりバーチャルなものであってリアルものではない。苦勞して書いた論文が本の形になっていないのは何か頼りない。リアルなものに慣れてきた人間はパソコンの中の論文をどうしてもプリンターで紙の形にしないと不安になる。電子化されても印刷の形で何部かは残しておきたいのである。

しかし、電子化のおかげで、インターネットにつながっている世界のあらゆる場所から、この紀要の論文を読み、手に入れることができる。パソコンの前で、論文検索に著者名や論文の題を入力すれば立ちどころに画面に論文が現れる。かつては、図書館まで足を運び、書庫へ入り、探しまわって、見つけた論文をコピーしてという手間が省けるのである。このような便利さと引き換えにバーチャルな世界に迷い込み、現実感覚を見失わないようにしなければならない。

(文責：高橋 正)

## 本号の執筆者

松 島 龍太郎 (まつしま りゅうたろう)	創価大学教授
Mukesh Williams (ムケーシュ ウィリアムス)	創価大学教授
藤 本 和 子 (ふじもと かずこ)	創価大学教授

## 投稿規定

1. 特別な場合を除き、投稿の時点において過去2年間継続して創価大学英文学会会員であること。
2. 研究論文, 400字詰め原稿用紙27枚程度(10頁以内), 英文は76(ストローク)×28(ライン), (10ページ以内) 厳守。応募者多数の場合, 編集委員会で検討します。
3. 次号メ切は2016年11月14日。
4. 宛先, 創価大学文学部『英語英文学研究』編集委員会。
5. テキストデータの提出は「USBメモリー」でお願いします。

創価大学 『英語英文学研究』第79号(第41巻第1号)

2016年9月30日

代 表 者 浅山 龍一

編集委員 松島 龍太郎

木下 薫

高橋 正

発 行 者 創価大学英文学会

〒192-8577

東京都八王子市丹木町 1-236

Tel. 042-691-2211

印 刷 所 株式会社紀伊國屋書店

本誌を無断で転載することを禁じます。

©The English Language and Literature Society of Soka University. 2016



**STUDIES IN THE ENGLISH  
LANGUAGE & LITERATURE**

No. 79 ( Vol. 41, No. 1 )

*September 2016*

THE ENGLISH LANGUAGE AND  
LITERATURE SOCIETY OF  
SOKA UNIVERSITY